

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第77集

ひがし かり やす か みち
東荊安賀道遺跡

1998

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野のほぼ中央に位置する尾西市は、木曽川・長良川・揖斐川の木曽三川が形成する肥沃な沖積地上にあり、古くから豊かな生産物に恵まれ、発展してきました。また市内には木曽川に分派流である日光川や、これに注ぐ野府川、小信川などが流れており、これらの河川は交通面でも大きな役割を担っていたと思われます。と同時に、これらの河川はたびたび洪水を引き起こし、時に多くの人々の生命を奪う恐ろしい存在でもありました。河川改修の進んだ現在の姿からは想像もできませんが、いろいろな面で人々の生活と深く関わっていたと言えるでしょう。

このたび東荊安賀道遺跡の発掘調査を行ないました。以前から縄文時代の遺跡であることは知られていましたが、その実態は良くわかりませんでした。今回の調査の結果、縄文時代晩期の土器のほかに、新たに古墳時代と中世の集落の様子を確認することができました。残念ながら縄文時代の生活の様子はわからないままですが、中世の時期の集落で、水から自分たちの生活の場を守るかのように何度も溝を掘っている様子は、河川の氾濫におびえつつも、その豊かな恵みを享受しながら暮らしていた生活の一端をうかがうことができるかのようにです。今回の調査の成果が、地域の歴史を学ぶ上での具体的な資料として、また今後学校教育や社会教育の場で活用されることを期待しております。

最後になりましたが、東荊安賀道遺跡の発掘調査につきまして、各方面の方々にご配慮を賜わり、また関係機関および関係者のご指導とご協力をいただいたことに対して、厚く御礼申し上げます。

平成10年 8 月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 塩見 修哉

例 言

- 1 本書は、愛知県尾西市開明字荻安賀道に所在する東荻安賀道遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じての委託事業として、平成7(1995)年4月から9月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。
- 3 発掘調査は赤塚次郎(本センター主査)、小泉 渡(同調査研究員、現一宮市立浅野小学校教諭)、伊藤太佳彦(同調査研究員)が担当した。
- 4 調査にあたっては次の各関係機関のご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・尾西市教育委員会
愛知県土木部一宮土木事務所・日本道路公団名古屋建設局及び一宮工事事務所
- 5 本書の執筆はIV章を鬼頭 剛・堀木真美子(本センター調査研究員)および尾崎和美(同調査研究補助員)が担当し、その他の執筆と編集を伊藤が担当した。
- 6 資料の整理及びトレースなどには田口雄一(本センター調査研究補助員)、遺物整理作業には平野昌子・松田典子・大西多賀子・岩城由枝・加藤美和子・野々垣裕美・高山正美・大津洋子・斎藤智可子(本センター整理補助員)の参加を得た。なお出土遺物の写真撮影は深川 進氏にお願いした。
- 7 本書の作製にあたっては、縄文時代の遺物に関しては野口哲也氏(愛知県教育委員会文化財課)に、古代の遺物に関しては尾野善裕氏(京都国立博物館)に、中世の遺物に関しては藤澤良祐氏・青木修氏(瀬戸市埋蔵文化財センター)に、それぞれご教示いただいた。
- 8 調査区に使用した座標は国土座標第Ⅶ系に基づくものである。
- 9 図版に掲載した遺物実測図の縮率は、石器の1/1・1/2と拓本の1/3を除いて1/4を基本とした。層序の記述は財団法人日本色彩研究所『標準土色帖』による。
- 10 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目 次

I	遺跡の立地と環境	1
	1 調査の概要.....	1
	2 地理的環境と周辺の遺跡.....	2
II	遺跡の概要	4
	1 層位.....	4
	2 遺跡の概要.....	6
III	遺構と遺物.....	10
	1 縄文時代.....	10
	2 古墳時代.....	12
	3 中世.....	18
IV	自然科学分析	29
	花粉・珪藻微化石分析からみた古環境.....	29
V	まとめ	35
	付表	39

図版目次

図版1	調査区全景 1
図版2	調査区全景 2
図版3	出土状況・遺構
図版4	出土状況・遺構
図版5	遺物 1
図版6	遺物 2
図版7	遺物 3
図版8	遺物 4
図版9	珪藻化石
図版10	花粉化石

挿図目次

第1図	調査区位置図 (1 : 5000)	1
第2図	周辺の遺跡 (1 : 25000)	3
第3図	基本層序模式図 (水平方向1 : 300、垂直方向1 : 50)	4
第4図	基本層序セクション図 (1 : 40)	5
第5図	古墳時代主要遺構配置図 (1 : 1000)	6
第6図	中世主要遺構配置図 (1 : 1000)	6
第7図	遺構図 1 (1 : 200)	7
第8図	遺構図 2 (1 : 200)	8
第9図	遺構図 3 (1 : 200)	9
第10図	縄文土器	10
第11図	石器実測図 (石斧1 : 2、石鏃1 : 1)	11
第12図	古墳時代遺物実測図 1	12
第13図	古墳時代遺物実測図 2	13
第14図	SK09遺構図 (1 : 40) および出土遺物 (1 : 4)	13
第15図	古墳時代遺物実測図 3	14
第16図	SD82・SD75・SX01出土遺物	17
第17図	中世遺物実測図 1	19
第18図	中世遺物実測図 2	20
第19図	SE01遺構図 (1 : 40) および出土遺物 (1 : 4)	20
第20図	中世遺物実測図 3	21
第21図	SE02遺構図 (1 : 40) および出土遺物 (1 : 4)	22
第22図	SE04遺構図 (1 : 40) および出土遺物 (1 : 4)	22
第23図	中世遺物実測図 4	24
第24図	中世遺物実測図 5	25
第25図	加工円盤・陶丸 (1 : 4)、土錘 (1 : 2)	26
第26図	加工円盤・度数分布図	27
第27図	SD82試料採取断面柱状図	29
第28図	SK67試料採取断面柱状図	29

第29図	SX01試料採取断面柱状図	30
第30図	SD82の主要珪藻化石群集	31
第31図	SK67の主要珪藻化石群集	32
第32図	SK67の主要花粉化石群集	32
第33図	遺物出土頻度 (1 : 800)	35
第34図	中世遺構配置図 (1 : 500)	36
第35図	遺物組成グラフ	37

表目次

第1表	加工円盤・一覧表	27
第2表	加工円盤・平均値	27
第3表	SD82花粉分析結果	31
第4表	SX01から確認される珪藻の特徴種	33

I 遺跡の立地と環境

1 調査の概要

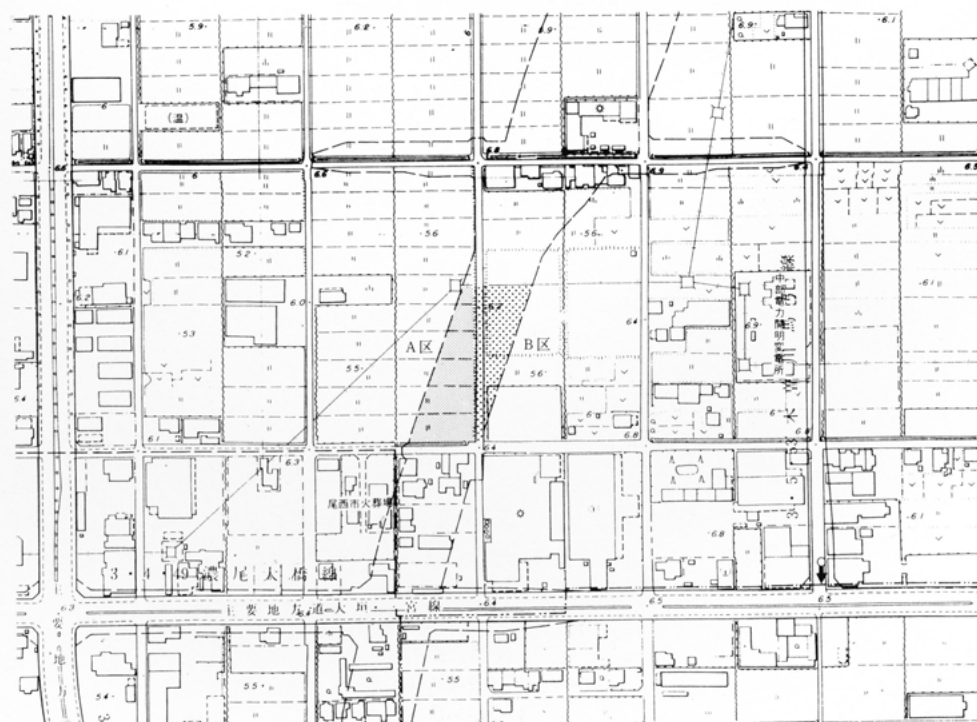
調査の経緯 東荊安賀道遺跡は尾西市と一宮市の境、尾西市開明字荊安賀道に広がる遺跡で、縄文時代の遺物散布地として愛知県遺跡番号 07005 で登録されている。

今回の調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。道路建設予定地内は既知の東荊安賀道遺跡より西側の区域であったが、平成5年に行った試掘調査で縄文時代晩期の土器片と中世の遺構・遺物が確認され、東荊安賀道遺跡が道路建設予定地内にまで広がる遺跡であることが明らかとなった。調査面積は4,424㎡で、調査区の中央を光ファイバーケーブルが南北に走っているため、これを境に西側をA区、東側をB区として平成7年4月から調査を行い、平成7年9月に終了した。

調査の概要 調査の結果、縄文時代の遺構は確認できなかったものの、古墳時代及び中世の集落跡であることが明らかとなった。

また遺跡の範囲についても、今回の調査と尾西市による調査で、従来考えられていたよりも広がることがわかってきた。

平成7年6月には、A区の西側に隣接する鉄塔の移設に伴う立会調査が尾西市によって行われ、中世の溝・土坑が検出されている。また今回の調査の結果を受けて、調査地点の南西に隣接する尾西市火葬場の建て替えに伴う調査が尾西市によって平成8年7月～8月にかけて行われ、遺跡の範囲がさらに南西方向に広がっていることが確認されている。



第1図 調査区位置図

2 地理的環境と周辺の遺跡

地理的環境 濃尾平野における沖積平野の地形は、上流側から扇状地地帯、自然堤防卓越地帯、デルタ地帯の3地形帯が典型的に配列しているのを特徴としている。

かつての木曽川本流は現在の境川筋にあり、現在の位置に移ったのは天正14年の大洪水以降とされる。そして「御囲堤」が完成して本流が固定されたわけだが、それ以前は多くの分派流がこの地域を流れていた。東荊安賀道遺跡は木曽川に分派流の1つである日光川によって形成された自然堤防帯に位置し、現在の状況は標高6m前後の水田地帯となっている。

周辺の遺跡 周辺の遺跡には、近年の東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査によってその内容が明らかとなった遺跡が多い。東荊安賀道遺跡の北方約1.2kmには、墳長40.5mを測る前方後方墳など3世紀中頃を中心とした遺構群が展開する西上免遺跡が位置し、その南西約500mの所には耕地関係と推定される古墳時代の遺構群が展開する東新規道遺跡がある。そして、西上免遺跡の東側の低地部をはさんだ対岸は、全長70mと一宮市内最大の古墳である車塚古墳をはじめとし、野見神社古墳、でんやま古墳、上野屋古墳、西宮社古墳、稲荷山古墳といった多くの古墳が存在する一宮市今伊勢地区にあたる。

一方、東荊安賀道遺跡の南約500mの所には、東西方向の溝によって区画された短冊形地割状に展開する室町時代の遺構群とともに多くの古瀬戸製品が出土した馬引横手遺跡がある。その東500mほどの所には、馬引横手遺跡とほぼ同時期に造墓活動が展開する法圓寺中世墓遺跡があり、反対に西に約2kmほど行った大平遺跡では、やはり東西方向の溝によって区画されている中世の遺構群が確認されている。いずれの遺跡も15世紀後半代を境に、洪水の影響によって遺跡が埋没していったと考えられている点が共通している。馬引横手遺跡では13世紀初め頃と思われる時期にも洪水性の堆積物が厚く堆積しており、木曽川本流が固定される以前、この地域の人々が水利・水運の面で木曽川に分派流の恩恵を受けつつも、絶えず洪水の恐怖におびえていた様子をうかがうことができる。

井関弘太郎（1988）「河道変遷」『木曽三川～その流域と河川技術』建設省中部地方建設局
赤塚次郎編（1997）『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
今西康二（1996）「東新規道遺跡」『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター
伊藤太佳彦（1996）「馬引横手遺跡」『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター
土本典生編（1995）『法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書』一宮市教育委員会
伊藤和彦編（1990）『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会
愛知県教育委員会（1994）『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』

(国土地理院発行1/25000地形図「一宮」をもとに作成)

Ⅱ 遺跡の概要

1. 層位

基本層序

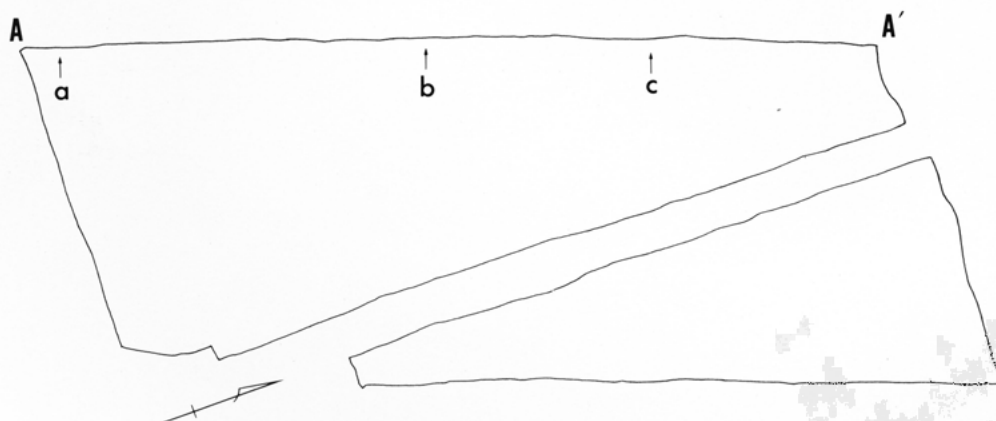
第3図はA区西壁断面の模式図である。表土（水田耕作土）の下に灰黄褐色シルトないし黒褐色シルトが堆積し、この直下で古墳時代及び中世の遺構を検出することができた。各遺構はベースである灰黄褐色細粒砂を掘り込んでいる。

調査区は大きく3つの区域に分けて考えることができる(第4図)。

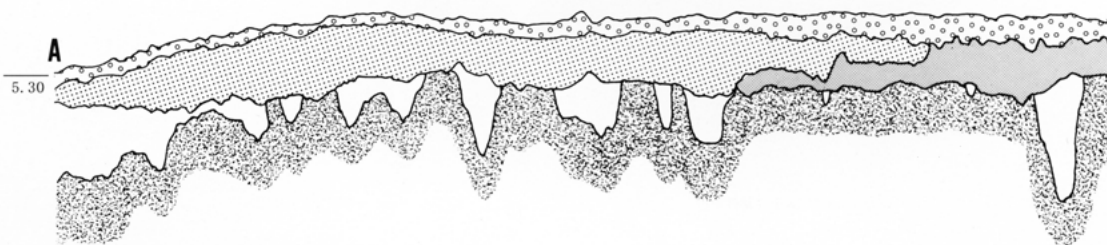
まずA区南側(セクション図a)であるが、表土(水田耕作土)の下に30cmほどⅡ層(灰黄褐色シルト)が堆積しており、その直下が遺構検出面となる。全体的に南に向かって低くなっている様子が確認できる。

それに対してA区中央部(セクション図b)では、部分的にⅢ層(黒褐色シルト)が確認できるものの、表土を取り除くと直ちに遺構検出面となり、ベースとなる灰黄褐色細粒砂に達する。もともとこの部分は高くなっていた可能性がある。

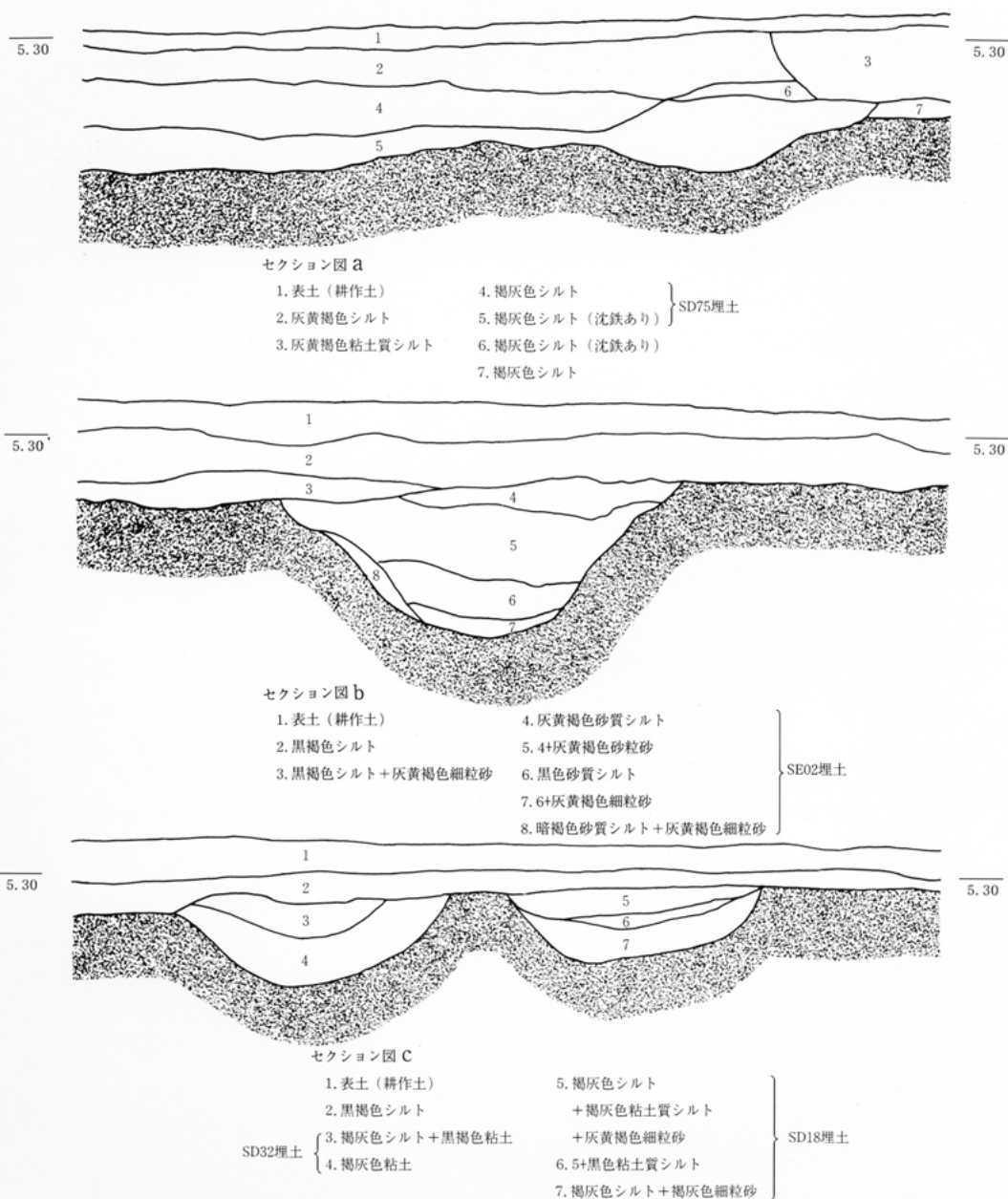
A区北側(セクション図c)ではⅢ層(黒褐色シルト)はほとんど見られない。特にSD32とした溝の北側が一段高くなっており、ここから北に向かって高くなっていく様子がわかる。



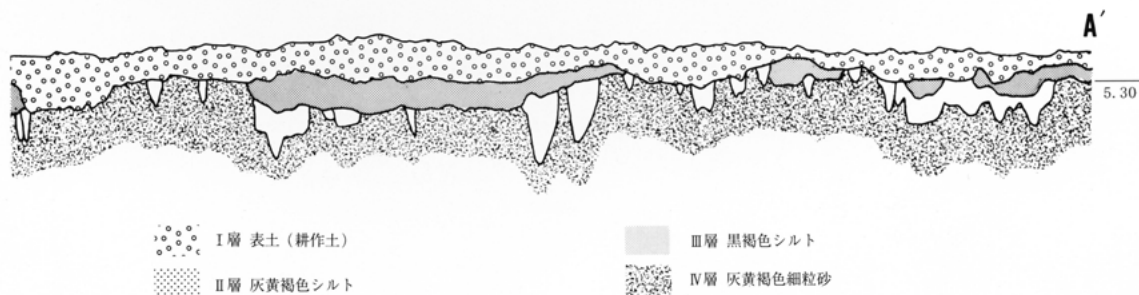
* a～cは次頁のセクション図の位置を示す



第3図 基本層序模式図(水平方向1/300、垂直方向1/50)



第4図 基本層序セクション図 (1/40)



2. 遺跡の概要

時期区分 東苅安賀道遺跡は、縄文時代、古墳時代、中世（鎌倉・室町時代）の3時期に大きく区分することができる。

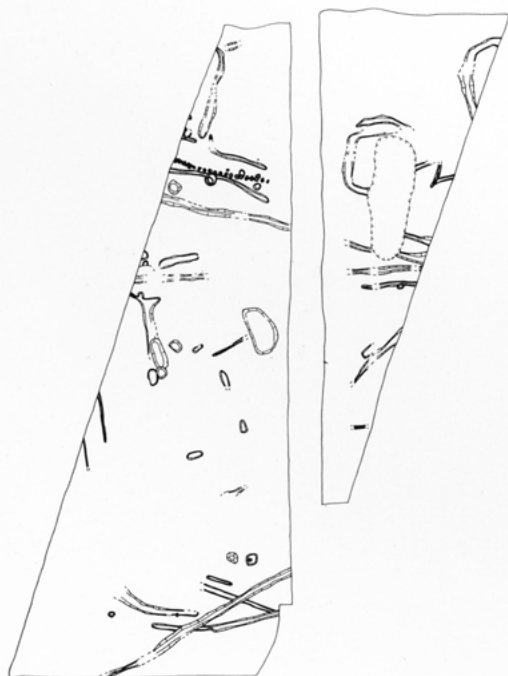
このうち縄文時代の遺構については今回確認することができなかったが、突帯紋期の土器と石器が何点か出土している。従来知られていた遺跡の範囲は調査区の東に位置していて、調査区内ではこの時期の遺構は確認できないことや、遺物の大部分はA区南側の低くなった部分からの出土で、それらが他の時期の遺物と混在して出土していることなどから考えると、出土した遺物は調査区内に流れ込んできたものと考えられる。

古墳時代の遺構は、A区北側の高くなった部分を中心として展開しており、A区からB区へと北西から南東方向に続く溝がこれを区画していると考えられる(第5図)。

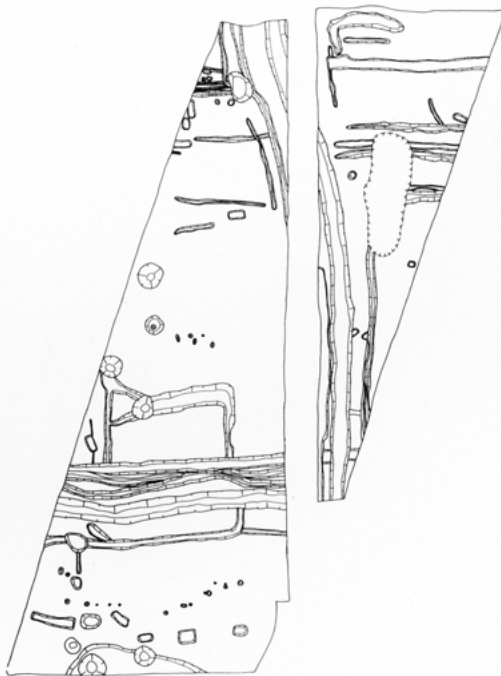
これに対して中世の遺構は、南側と東側を数条の溝で区画し、その内側の部分に居住域が展開していると考えられる(第6図)。

どちらの時期も遺物の量は多くないが、そのほとんどは西側のA区から出土しており、B区からはあまり遺物は出土していない。A区から西にかけてが遺跡の中心と考えられる。

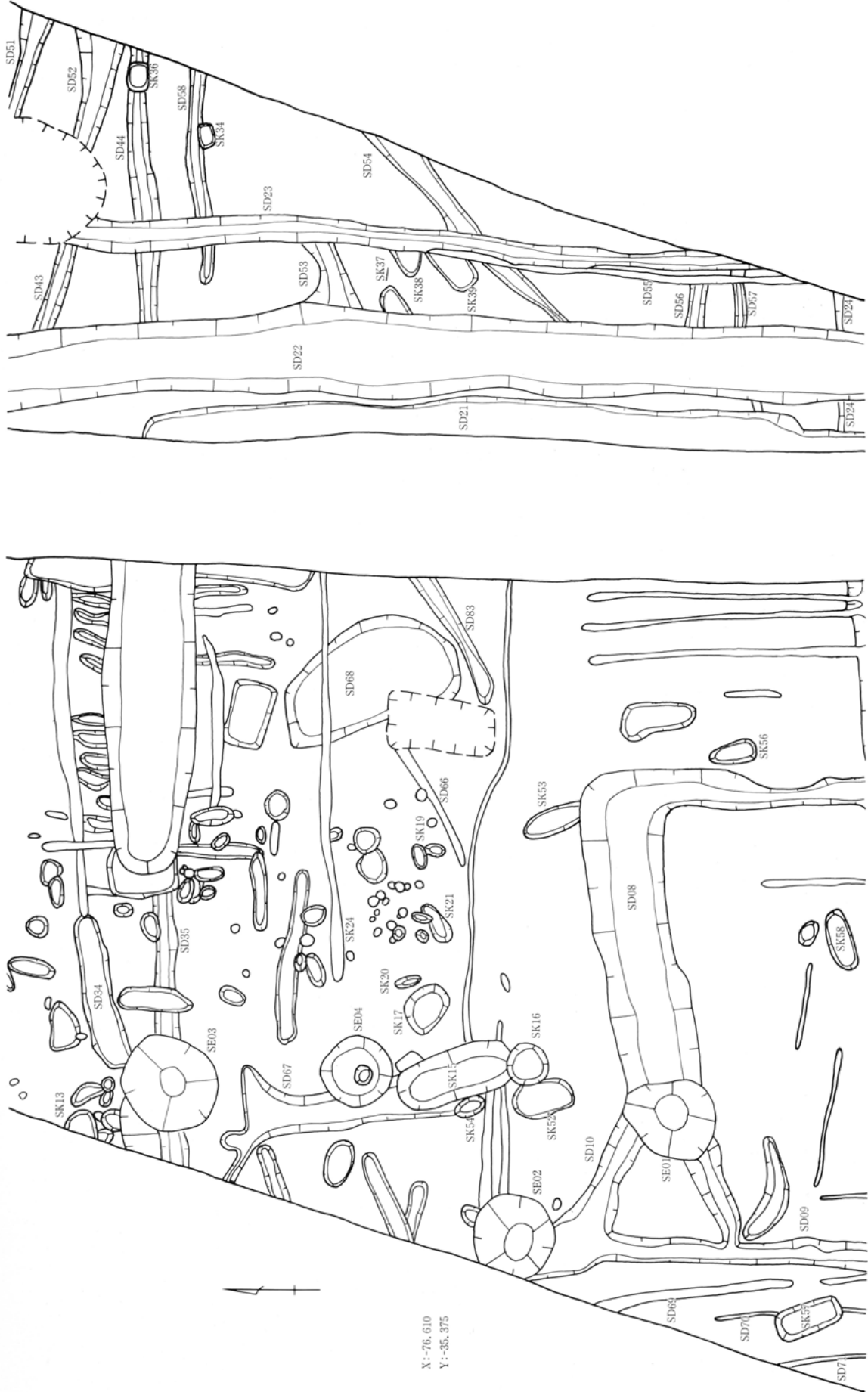
その他A区南側の低地部からは須恵器が数点出土している。また包含層中には近世の遺物も若干見られた。



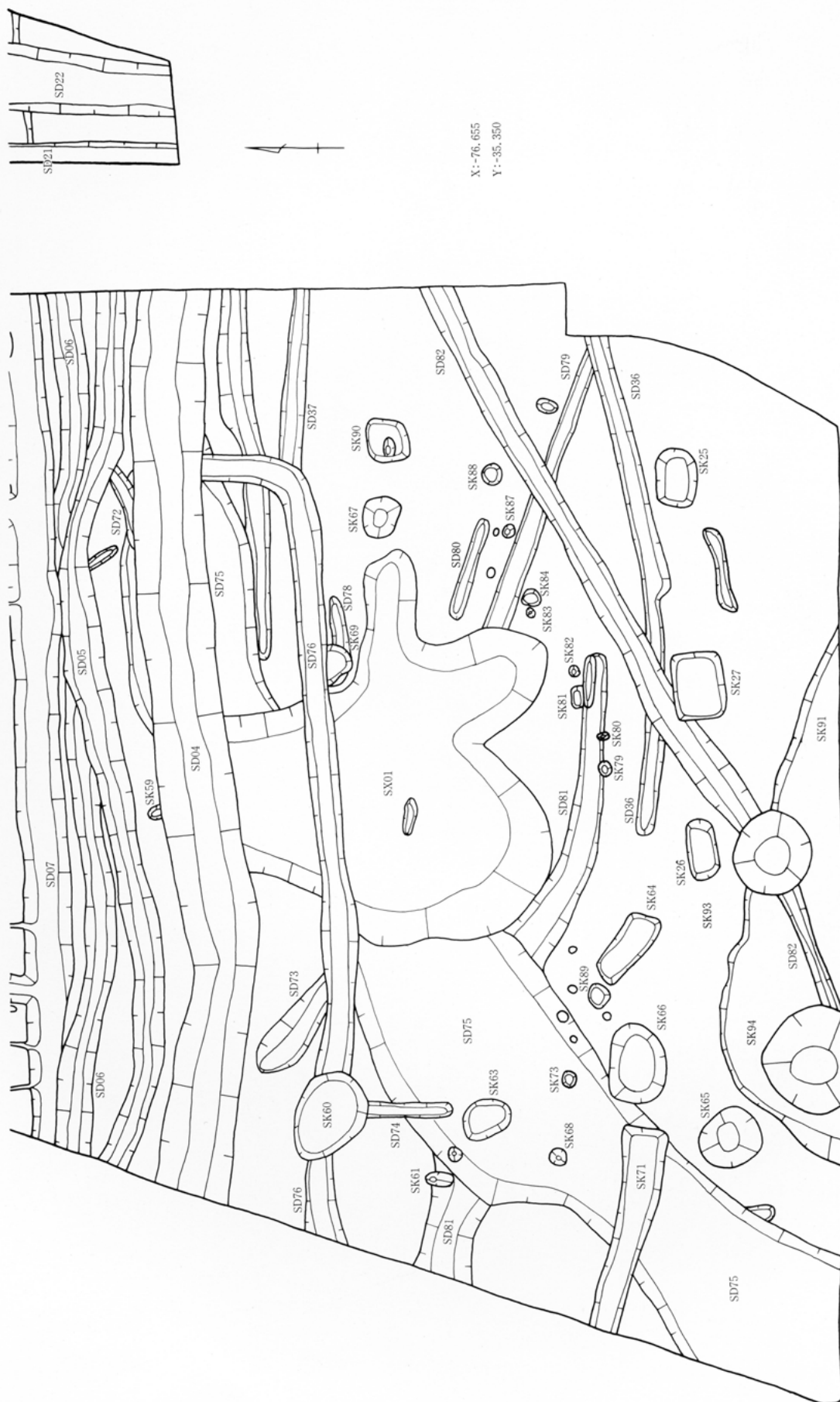
第5図 古墳時代主要遺構配置図 (1/1000)



第6図 中世主要遺構配置図 (1/1000)



第8図 遺構図2 (1/200)



第9図 遺構図3 (1/200)

Ⅲ 遺構と遺物

1. 縄文時代 (第10、11図)

縄文時代の遺構は確認できなかったが、若干の遺物が出土している。

これらの遺物はA区南側の低くなった部分を中心に出土しており、調査区周辺からの流れ込みによるものと考えられる。

土器

土器は晩期の突帯紋系の土器で、五貫森式段階のものである。

1～7は基本的に深鉢形もしくは甕形の土器と思われる。1～3は砲弾形を基調とした深鉢形土器である。1は口径23 cm程度で、口縁端部に面取りを行っているのが特徴的である。4は口縁端部にヘラで刻みを施すタイプの土器で、頸部には二枚貝腹縁によるとと思われる条痕調整が行われている。5～7は口縁下に一条の突帯を有するタイプの土器である。5と6には突帯上にD字状の刻みが施されていて、5は口縁端部を面取りしているが、6は面取りを施さず、突帯上の刻み目もややつぶれた感じである。7は突帯に刻みを施しておらず、突帯自体もやや上向きに付けられているのが特徴的である。8は口縁下に素紋突帯が付く浅鉢形の土器と思われる。

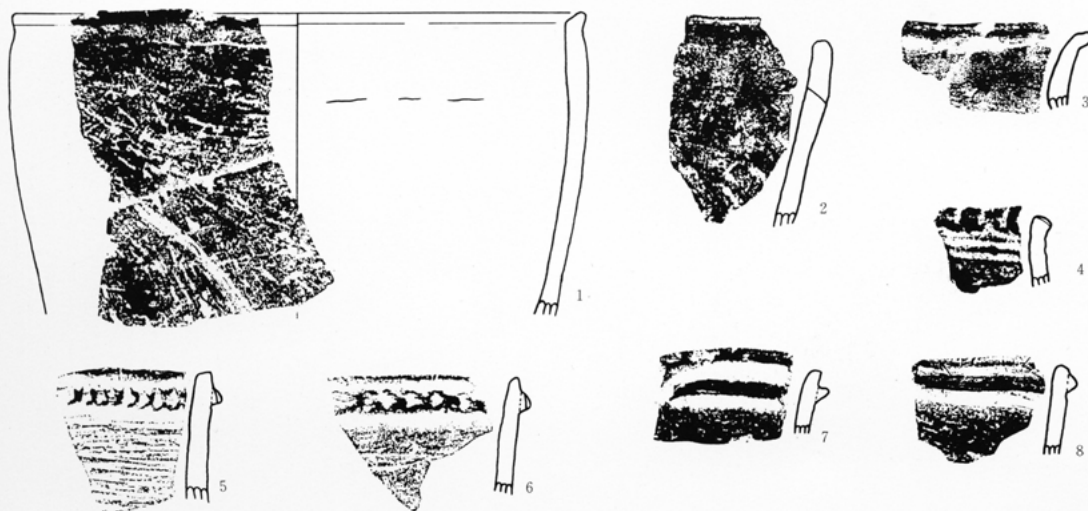
石器

石器は打製石斧、磨製石斧がそれぞれ1点ずつ、石鏃が13点出土している。

9の打製石斧の斧身側縁には細かく調整が施されているが、ちょうど基部の折れた辺りで磨滅している部分があり、装着痕の可能性もある。10の磨製石斧は全面を敲打整形し、刃部のみを研磨したもので、刃部には使用痕が認められる。

13点の石鏃のうち、無茎鏃は4点である。11～13は凹基無茎のもので、11が五角形、12が三角形、13が側縁が外彎する三角形である。14は平基無茎で側縁が外彎する三角形である。有茎鏃が9点で、15と16は平基有茎擬似五角形、17～22は平基ないし凸基有茎で側縁に段を持つ五角形、23は凸基有茎長三角形である。

石材別では11と21がチャート、12、13、18、19の4点がサヌカイト、その他の7点が下呂石である。



第10図 縄文土器



第11図 石器実測図 (石斧1/2、石鏃1/1)

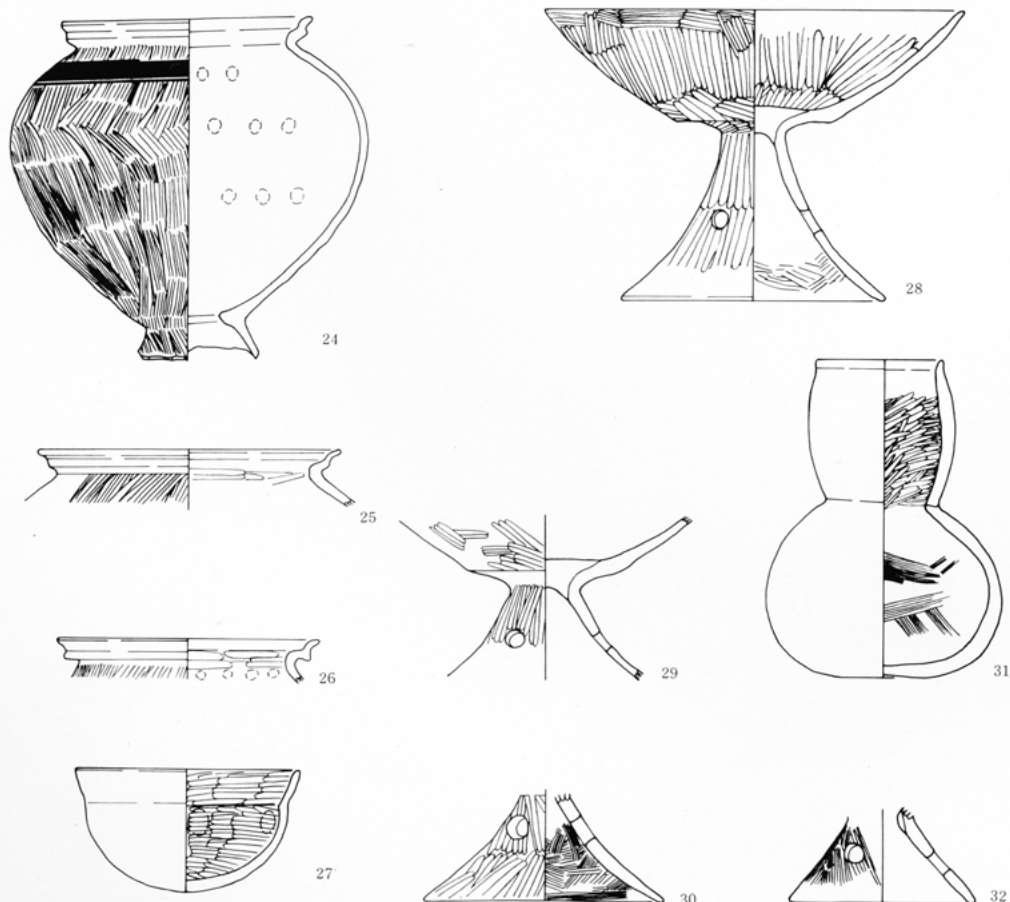
2. 古墳時代 (第12図～16図)

主要な遺構について

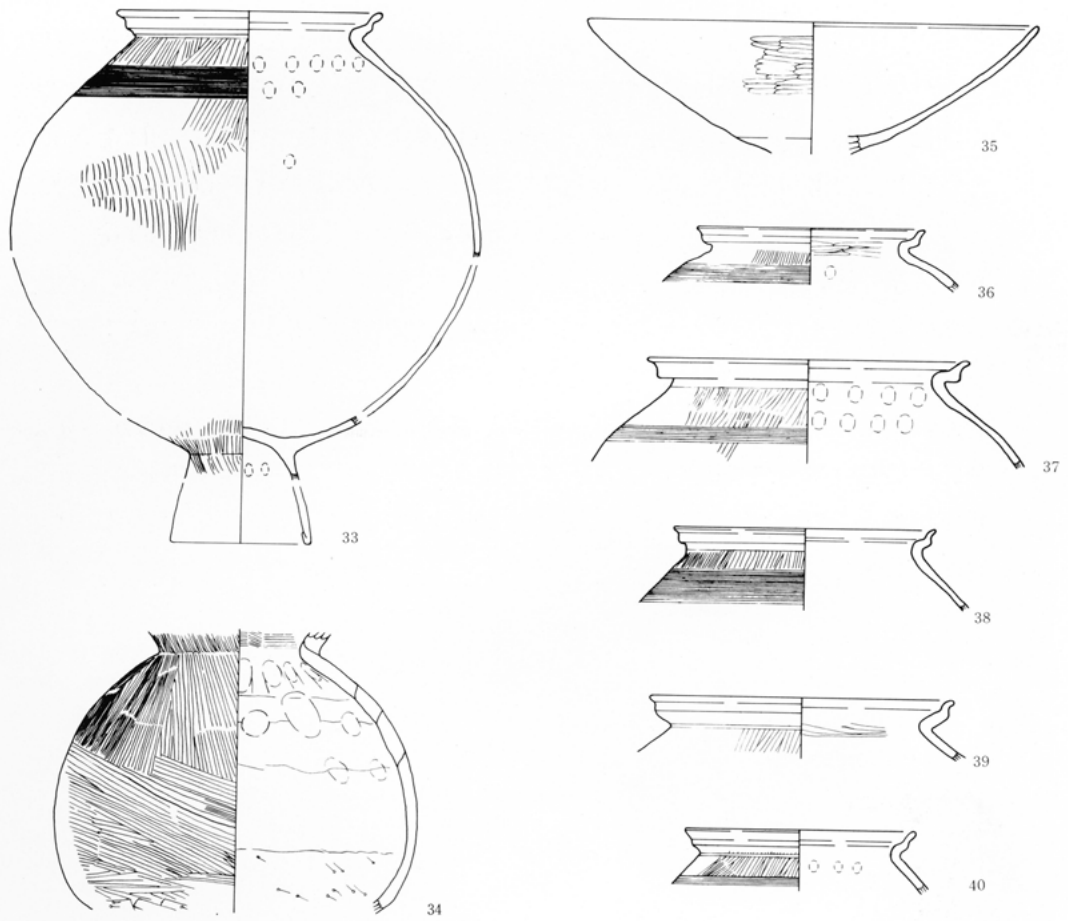
古墳時代の主要な遺構については第5図に示したとおりである。中世の遺構もあってなかなか全体像はつかみにくいのだが、A区からB区にかけて北西から南東に続くSD32、SD43、SD52といった一連の溝と、A区南側で北東から南西方向に走るSD82という2つの溝がポイントとなると思われる。そこで古墳時代の遺構および遺物については、①SD32、SD43、SD52といった溝とその北側の区域、②SD32などの南側の区域、③SD82とその周辺部分の3つの区域に分けて見ていきたい。

SD32 などの溝の北側の区域

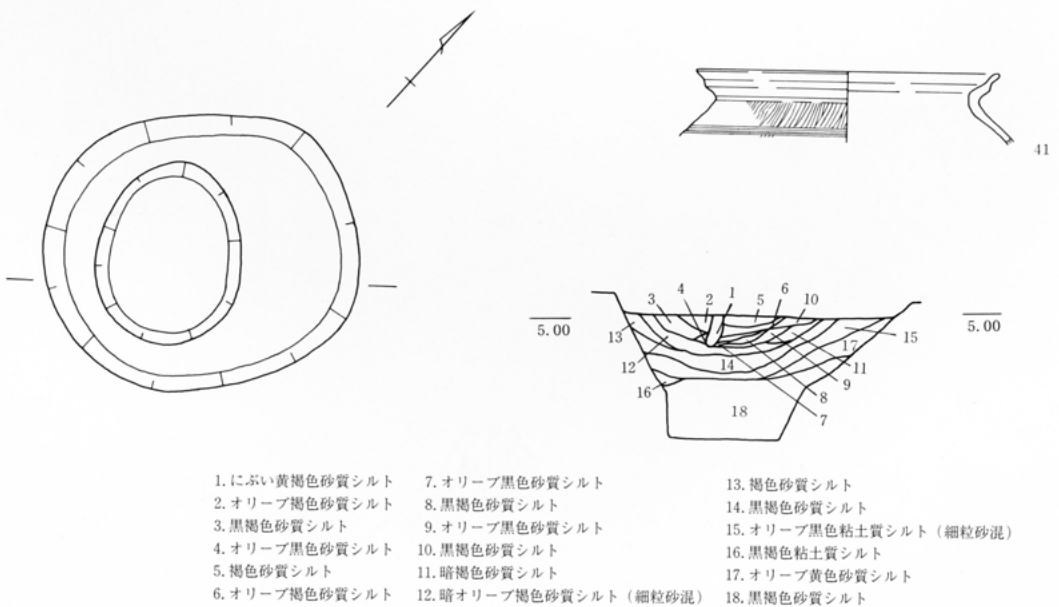
まず①の区域についてだが、基本層序のところで確認したように、A区ではSD32を境として北側の部分が高くなっている。さらにSD32のすぐ北側には、これと並行するように土坑群 (SA01) が展開しており、区画を意識している様子がうかがえる。今回住居跡は確認できなかったが、この部分が微高地状に高くなっていることと、井戸状の土坑であるSK09の存在などから、この北側の部分に居住域が展開していく可能性が考えられる。



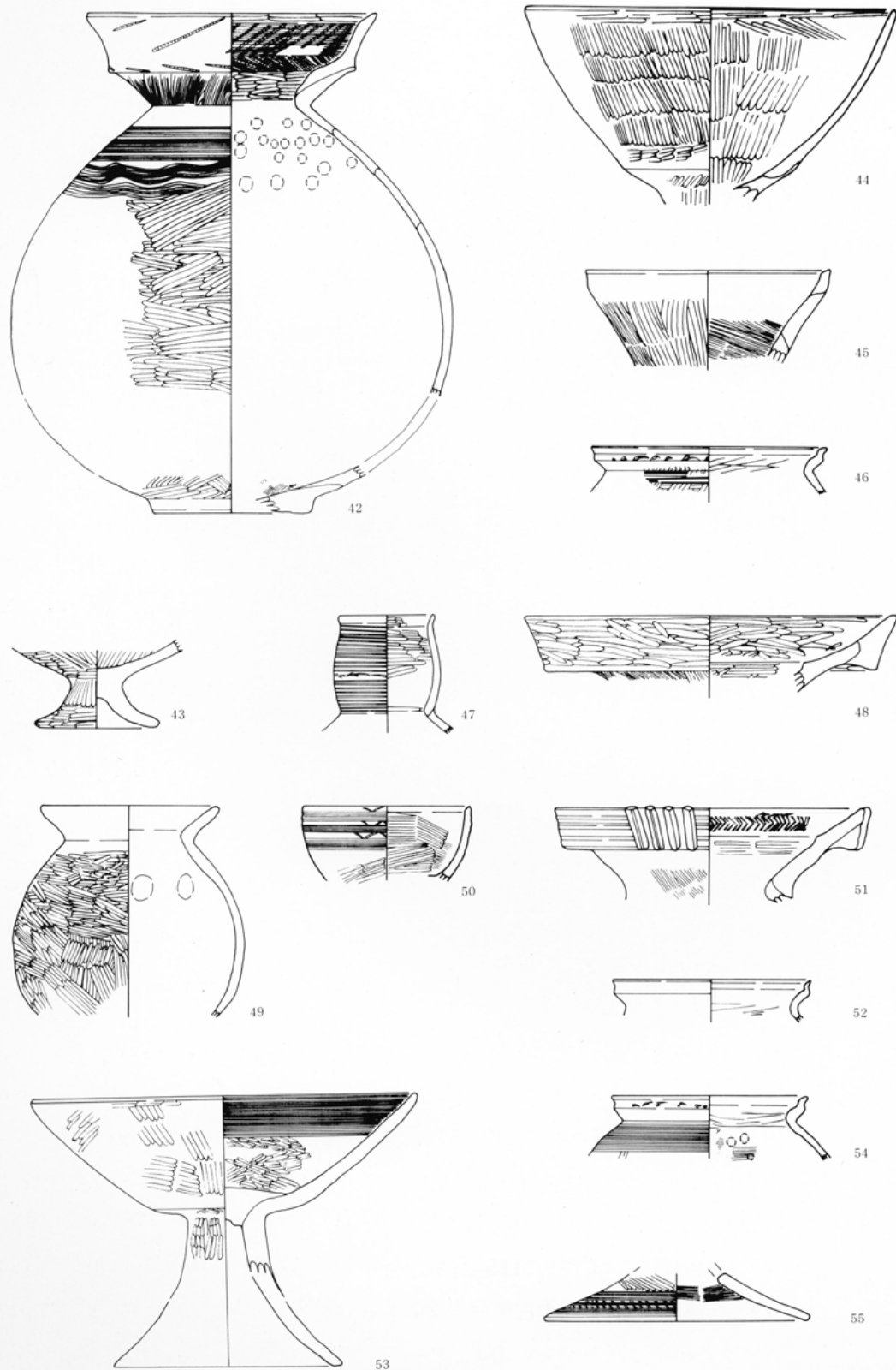
第12図 古墳時代遺物実測図 1



第13図 古墳時代遺物実測図2



第14図 SK09遺構図 (1/40) および出土遺物 (1/4)



第15図 古墳時代遺物実測図 3

それに対してB区側は攪乱などによって今一つ状況がよくわからないのだが、周溝と思われるSD26やSD41、SD31などの存在はA区とはやや異なる様相を示している。またA区の遺構も、主なものは調査区西壁付近に集中しているのに対して、A区東側では遺構は認められない。どうやら居住域はA区から西の方に広がっていくようであり、このことから同じ溝の北側といってもA区とB区とは分けて考えた方がよさそうである。SA01もB区までは続いておらず、A区とB区の間には溝などが存在したかもしれない。

次にこの区域から出土した遺物について、主な遺構ごとに見ていくことにする。

SD32

SD32は幅115cm、深さ50cmほどの溝で、ここからは比較的まとまって遺物が出土している(24～30)。24～26はS字甕B類だが、このうちの24の底部には焼成後に孔がけられていて、使用痕も全く認められないという特徴を持つ。また台部下半部が欠損しているのだが、破損したというより、意図的に打ち欠いているように見える。このように台部下半部を打ち欠いたり底部を穿孔した意味については、使用痕もなく、他の用途への転用を目的としたとは考えにくい。やはり他の甕などとはっきりと区別することを意識していたと考えたい。

27は口径10.8cm、器高6.6cmの小形の丸底の鉢で細かいヨコ方向のミガキが施されている。28～30は高杯で、28と29は杯部内面に多条沈線文が多用される西濃型高杯である。

SD52

SD32から続くと思われるSD52は幅110cm、深さ55cmほどの溝である。ここから出土したヒサゴ壺(31)は、口径6.6cm、底径5.2cm、器高11.9cmで、底部は丸底でややくぼんでいるが、口頸部は体部に比べてそれほど小さくはない。

SD43

同じくSD32から続くと思われるSD43は幅90cm、深さ50cmほどで、ここからは器台(32)が出土している。

これらの一連の溝の遺物は、31が廻間Ⅰ式期末までさかのぼる要素を持っているものの、おおむね廻間Ⅱ式～Ⅲ式期の初めにかけての遺物と考えられる。

SD32の北側の主な遺構としては、SD32に直交するような形のSD59やSK50、井戸状のSK09などがある。

SD59

SD59は深さ27cm、断面がU字形の溝で、S字甕C類(33)、直口壺(34)、有段高杯(35)などが出土しており、廻間Ⅱ式～Ⅲ式期前半の遺物である。SK47(36)やSK50(37～39)、SK92(40)ではS字甕B類が出土している。

SK09

SK09は径150cm、深さ90cmほどの円形の土坑で、断面は井戸状に二段に掘り込まれている。ここから出土したS字甕(41)もSK50などとほぼ同時期のものである。

以上のように、SD32の北側に展開する遺構群の時期は廻間Ⅱ式期後半～Ⅲ式期の初めに位置づけられ、SD32に区画されるように遺構が展開していた様子がうかがえそうである。

これに対してB区側は全体的に遺構・遺物とも少なく、SD43やSD52の北側の部分についても、周溝と考えられるSD26やSD41が目につく程度で、A区とはかなり異なった状況にある。

**SD26
SD41** SD26からは柳ヶ坪型壺(42)が出土している。口縁部は二重口縁技法によって積み上げ状に作られており、廻間Ⅲ式期の後半に属するものである。SD41からは壺の脚部と思われる43の他に、図示できなかったが廻間Ⅱ式期の終わり頃と思われる碗形高杯の杯部の破片も出土している。

**SD32 などの
南側の区域** 次に、SD32などの南側にあたる②の区域について見ていきたい。

SD32などとはやや方向を異にするSD35、SD44、SD58といった東西方向の溝や、これと直交する方向性を持ちそうなSD67やSD68などの溝、SK15やSK54といった土坑などが認められるものの、全体に遺構・遺物とも希薄である。

SD35 SD35から出土した49は、口径11cmほどで、口縁がやや内湾するタイプの小形の甕と思われるが、内・外面の調整はヘラミガキで行っている。

SD68 SD68からは有段高杯(44)、直口壺(45)の他に、S字甕A類新段階の脚部も出土しており、廻間Ⅰ式期後半の遺物群と考えられる。

SD67 SD67からは、押引刺突文をもつS字甕A類新段階の口縁部(46)やヒサゴ壺(47)などが出土している。ヒサゴ壺の口頸部には、貝殻刺突による連弧文に横線文を付加しており、おそらく体部にも文様が入るものと思われる。これらの遺物は、48の壺の口縁部も含めて、おおむね廻間Ⅱ式の段階のものと考えられる。

SD67を切って掘削されているSK15およびSK54からはまとまって遺物が出土している。

SK54 SK54は長軸190cm、短軸120cm、深さ25cmの楕円形の土坑で、断面形はU字形である。ここから出土した50は、貝殻刺突による波線文と横線文によって加飾された有稜低脚高杯の杯部である。51のパレススタイル壺、52のS字甕B類の口縁部とともに、廻間Ⅱ式期前半の遺物である。

SK15 これに対してSK15は、長軸385cm、短軸167cm、深さ54cmの長方形の土坑で、断面形はU字形である。ここから出土した有段高杯(53)は口径24cm、器高17cmほどで、杯部内面に多条沈線文を施す西濃型高杯である。さらに廻間Ⅱ式期前半の有稜低脚高杯の脚部(55)が出土しているほか、S字甕A類の口縁部(54)も出土している。

**SD82の
周辺区域** SD82を中心とした③の区域では、基本的には北東から南西方向にA区南側部分を横切るSD82以外にはあまり遺構を確認できなかった。

SD82 SD82は幅90cm、深さ24cmほどの断面がU字形の溝である。ここからは、A類新段階のS字甕(56)、廻間Ⅱ式期後半のパレススタイル壺(57)、廻間Ⅲ式期の柳ヶ坪型壺(59)、山中式後期の高杯(58)などが出土している。

**SD75
SX01** SD82の北側にはSD75やSX01があるが、縄文土器から灰釉系陶器まで各時期の遺物が混在して出土しているといった状況で、SD82などの他の遺構とは全く様子が異なっている。基本層序のところで確認したようにA区の南側部分は低くなっており、SD75は調査区の南端に位置している。またSX01の土層の堆積状況を見ると、オリブ黒色の粘土が50~60cm程堆積していて絶えず水に浸かっているような状態にあったと考えられる。このようにSD75およびSX01の周辺は湿地的な環境にあったものと

考えられ、出土した遺物も周囲からの流れ込みによるものと思われる。

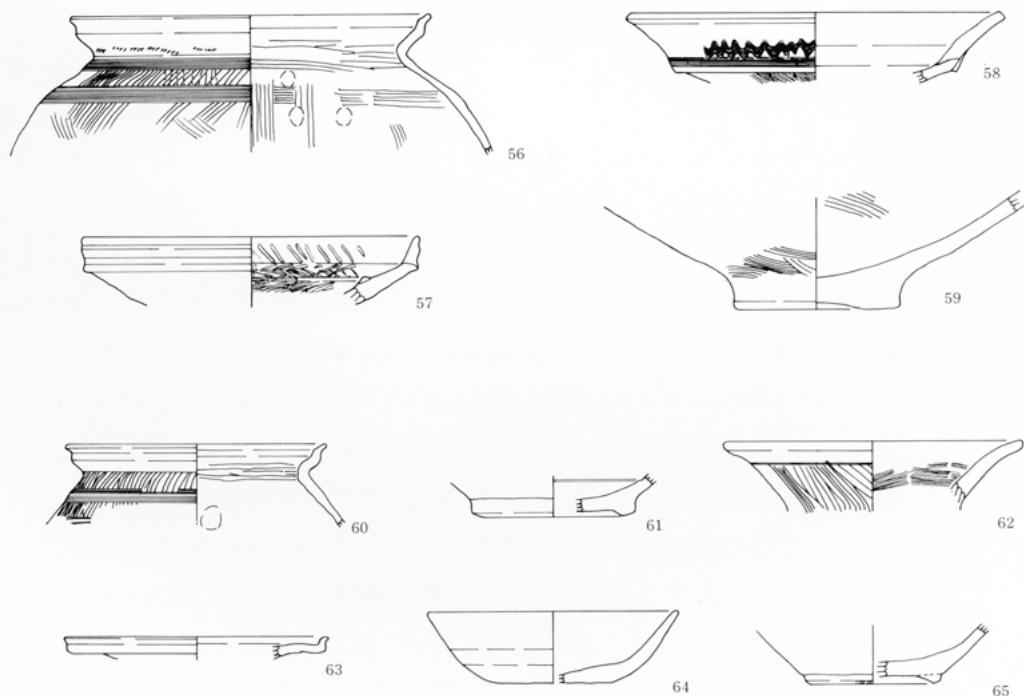
実際、中世の段階になるとSD75やSX01の北側には東西方向の溝（SD04～SD08）が繰り返し掘られている。溝の北側には居住域が展開していたと考えられ、SD75やSX01と居住域とを区画していたようである。古墳時代においても、SD82がSD04などと同様の役割を果たしていた可能性もあるかもしれないが、その一方で花粉および珪藻微化石分析の結果からは、SD82と、SD75およびSX01では全く反対の結果が得られている。

SD75とSX01の遺物は新しい時期のものも含むが、ここでふれておくことにする。

前述したように、SD75は縄文土器から灰釉系陶器まで幅広い時期の遺物が出土している。縄文時代のところでふれた砲弾形の深鉢形土器（第10図1）もSD75出土の遺物である。第16図に示したのは、B類古段階のS字甕（60）と白磁の碗（61）である。61は削り出しの浅い厚い高台で、内面には沈線状の段を持っている。大宰府編年のIV-1類に相当すると思われる。

SX01の遺物の出土状況もSD75と同様だが、今回の調査で須恵器が出土しているのはSX01だけである点が注目される。

遺物には図示した猿投窯産の9世紀前半の盤（63）、美濃須恵窯産の8世紀代と思われる杯（64）、尾張型第5型式の灰釉系陶器碗（65）などの他、美濃須恵窯産の8世紀前半の平瓶、常滑窯産の12世紀代の三筋壺なども出土している。



第16図 SD82・SD75・SX01出土遺物

3. 中世 (第17図～25図)

かなり大きなくくり方になってしまったが、全体に遺物量が少なく、しかもその多くが重複した溝からの出土ということで、厳密に分けることができなかった。ただ灰釉系陶器の時期的な傾向から言うと、尾張型第5型式と東濃型大洞東1号窯式の2つの時期の遺物が比較的多いと言えそうで、大きく2時期に分けて考えることができるかもしれない。

主要な遺構について

中世の主要な遺構の配置図は第6図に示したとおりで、SD04、05、06、07といった東西方向の溝群と、SD11、12、19、22、23といった南北方向の溝群を基本としていると考えられる。そしてこの東西および南北方向の溝群を基準として、①溝の内側の部分（A区中央部分を中心とした区域）と、②溝の外側の部分（特にSD04以南のA区南側部分）とに分けられそうである。

基本層序図で確認したように、SD04～07の北と南では地形的に異なっていたと考えられる。SD04の南側は低くなっており、SD75やSX01の状況から見ると湿地的な環境にあったと考えられる。それに対して溝の北側、特にSE02の北側は地形的にもともとは高くなっていたと思われ、東西の溝が何度となく掘り直されているのにはこうした地形的な要因があったものと考えられる。そしてこれと連動する形で南北方向の溝も掘られたのだろう。これらの溝に囲まれたA区中央部分には井戸が何基もあり、この部分が居住域であったと考えられる。

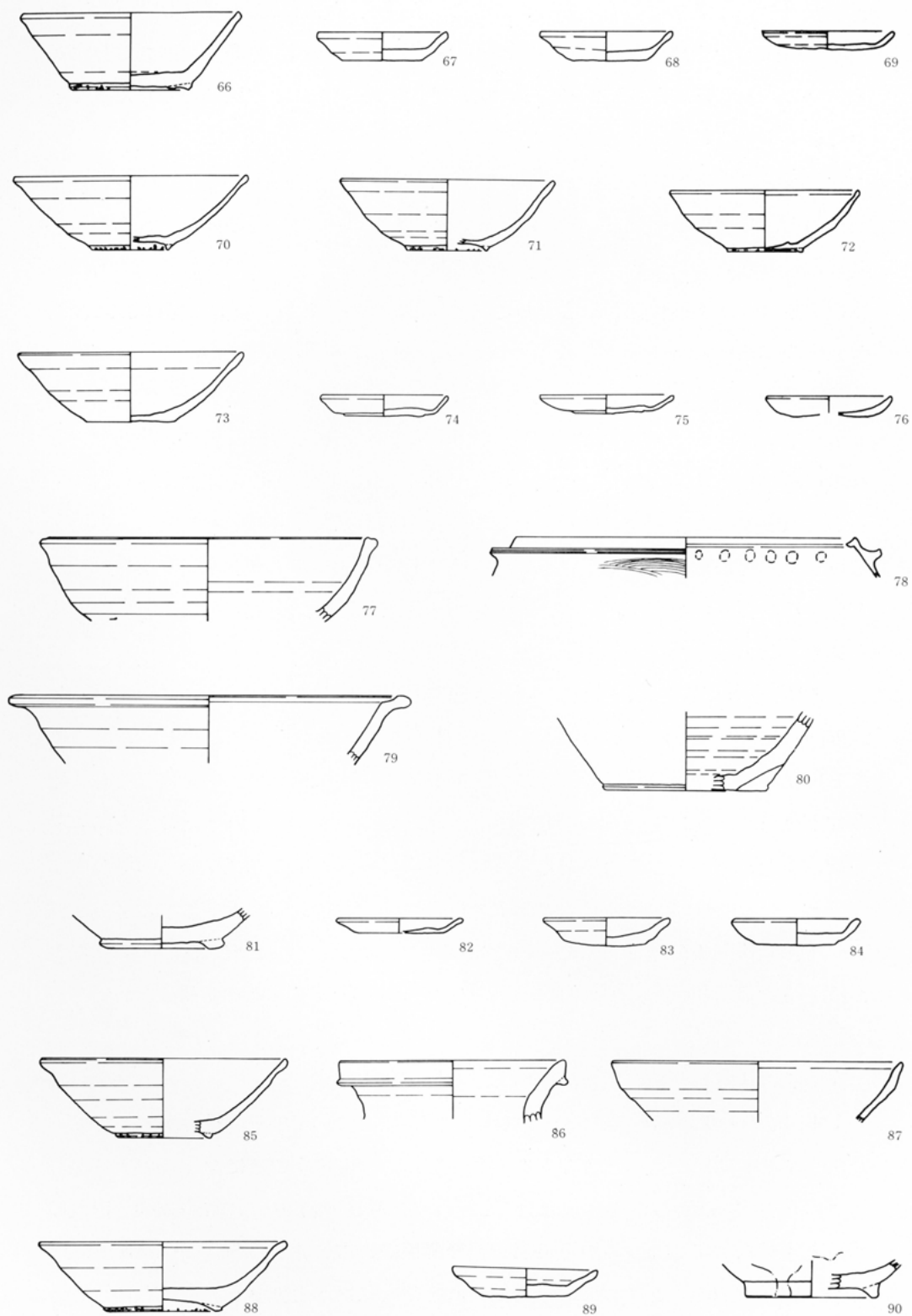
一方溝の外側部分について見ると、A区には平面形が方形で埋土が斑土といったSK25～SK27のような土坑も何基もあり、墓域的な性格もあったかもしれない。またB区は中央を大きな攪乱が占めているものの、遺構・遺物ともに希薄である。ただ北側部分にはSD27、SD42とSD46、SD25とSD29、SD48といった東西方向の溝が何本か並んでいて、これに対応するかのようにA区北部でも東西方向の溝が並んでいる。その性格は不明であるが、南側のSD04などの溝とは規模や遺物の量も違っている。花粉分析の結果からは、周辺に畑地が広がっていたと推定されていることから、一つの可能性としてそういった耕作関連の遺構であると考えられるかもしれない。

次にこの時期の遺物を主要な遺構ごとに見ていきたい。

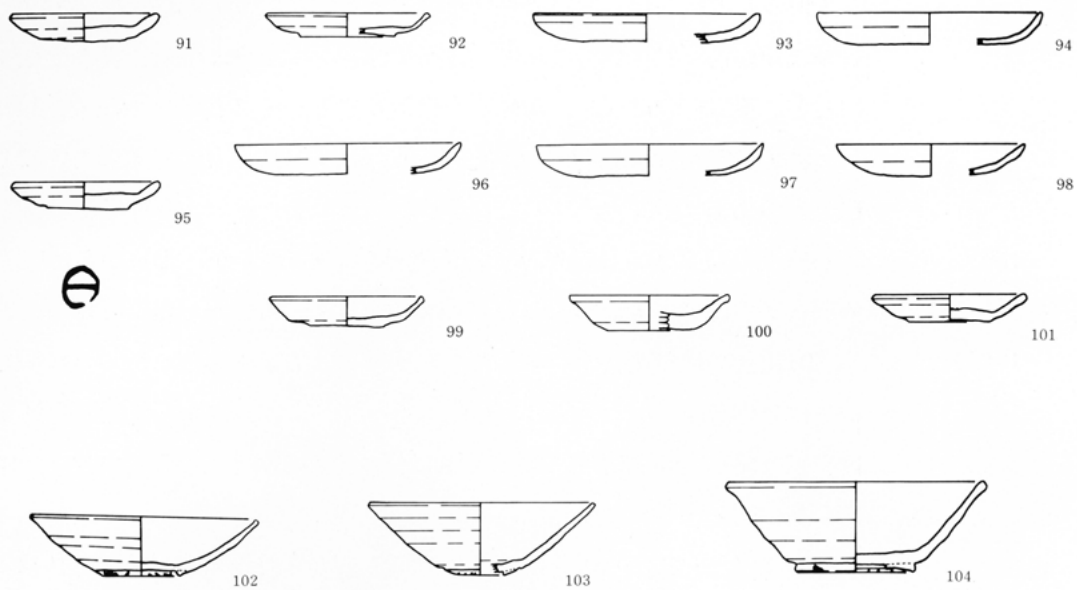
まずSD04～07の溝群であるが、このうちSD04については一度掘り直されており（SD04 aおよびSD04 b）、合計5本の溝が切り合っていることになる。大きさとしては幅が約120cm程度から広い部分で200cm弱、深さが約40～70cm程度で、南側の溝ほど深くなっている。これらの溝の前後関係は、古い方からSD07→SD06→SD05→SD04 b→SD04 aとなっており、掘り直すごとに南へと拡張していったようである。

SD04

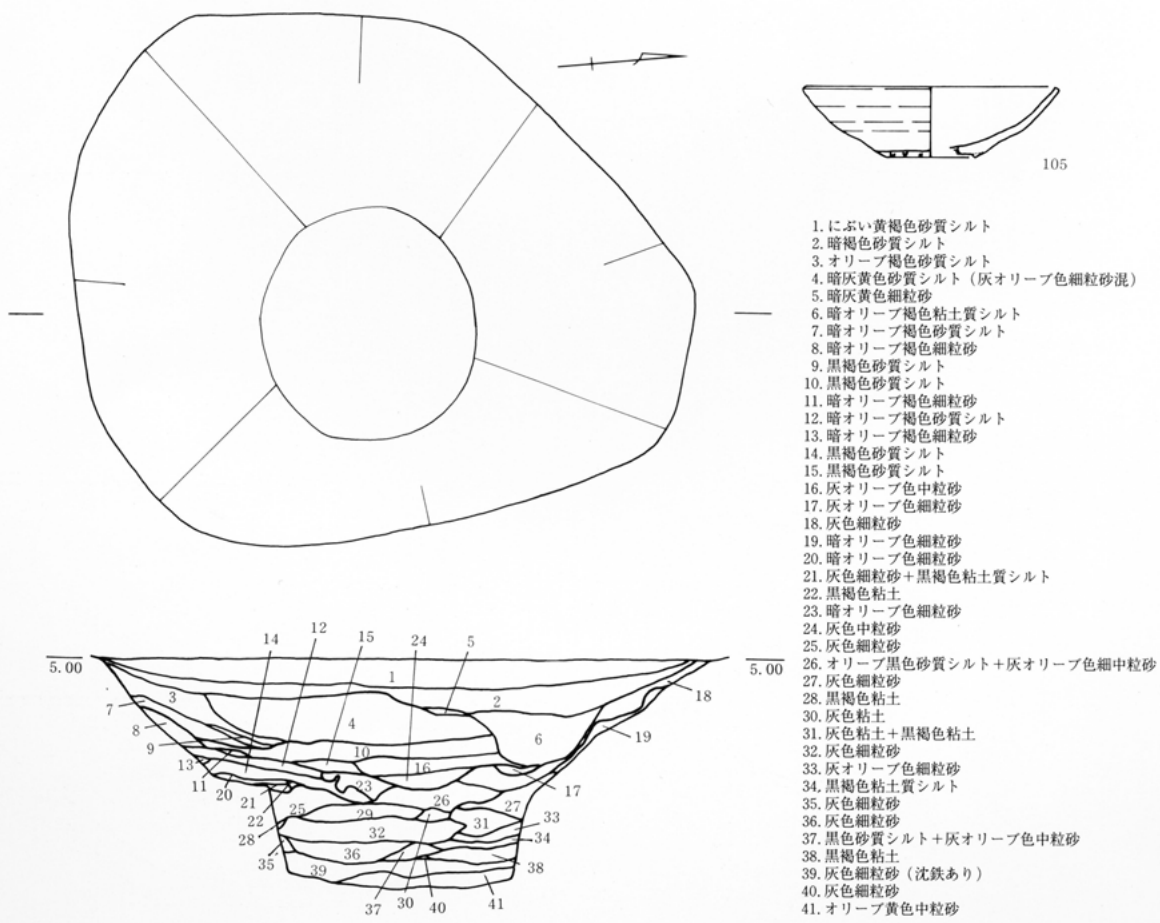
SD04出土の遺物には灰釉系陶器（66～75、81）、土師器皿（76）・鍋（78）、古瀬戸製品（77、79、80）、陶丸（第25図200）などがある。



第17図 中世遺物実測図1



第18図 中世遺物実測図 2



第19図 SE01遺構図 (1/40) および出土遺物 (1/4)

遺物の大半は灰釉系陶器で、いわゆる北部系のものが中心だが、渥美・湖西型第5型式期の椀（81）が出土している点が目を引く。76は磨滅しているため詳細は不明だが、手づくねの皿で、口縁部を面取りするタイプと思われる。また煮炊具として、羽釜型の土師器鍋（78）の他に古瀬戸製品（80）が見られるのも特徴である。底部のみの出土だが、内面にロクロ目がはっきりとあり、土瓶の類だと思われる。

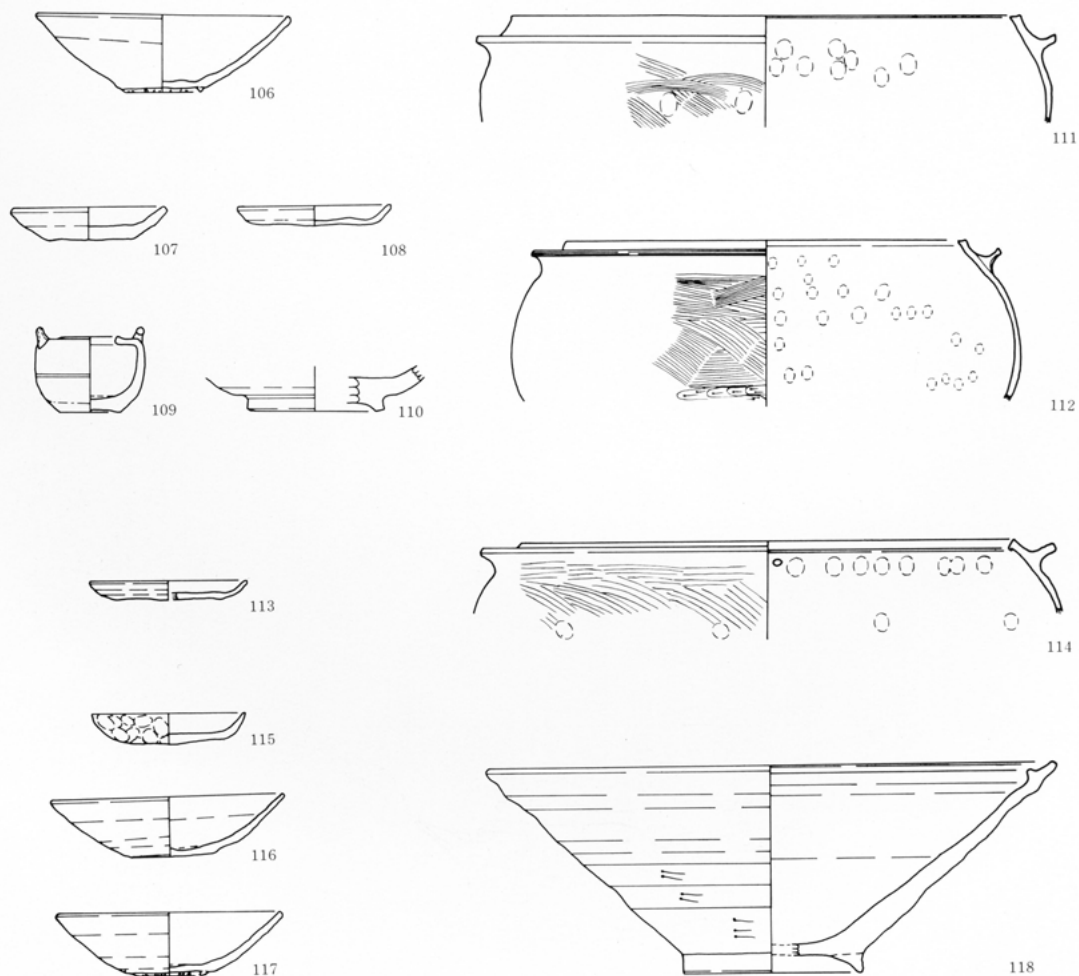
SD05
SD06

SD05からは東濃型大洞東1号窯式段階の小皿（82）が、SD06からは灰釉系陶器の他に古瀬戸後IV期古段階の四耳壺（86）や平碗（87）が出土している。

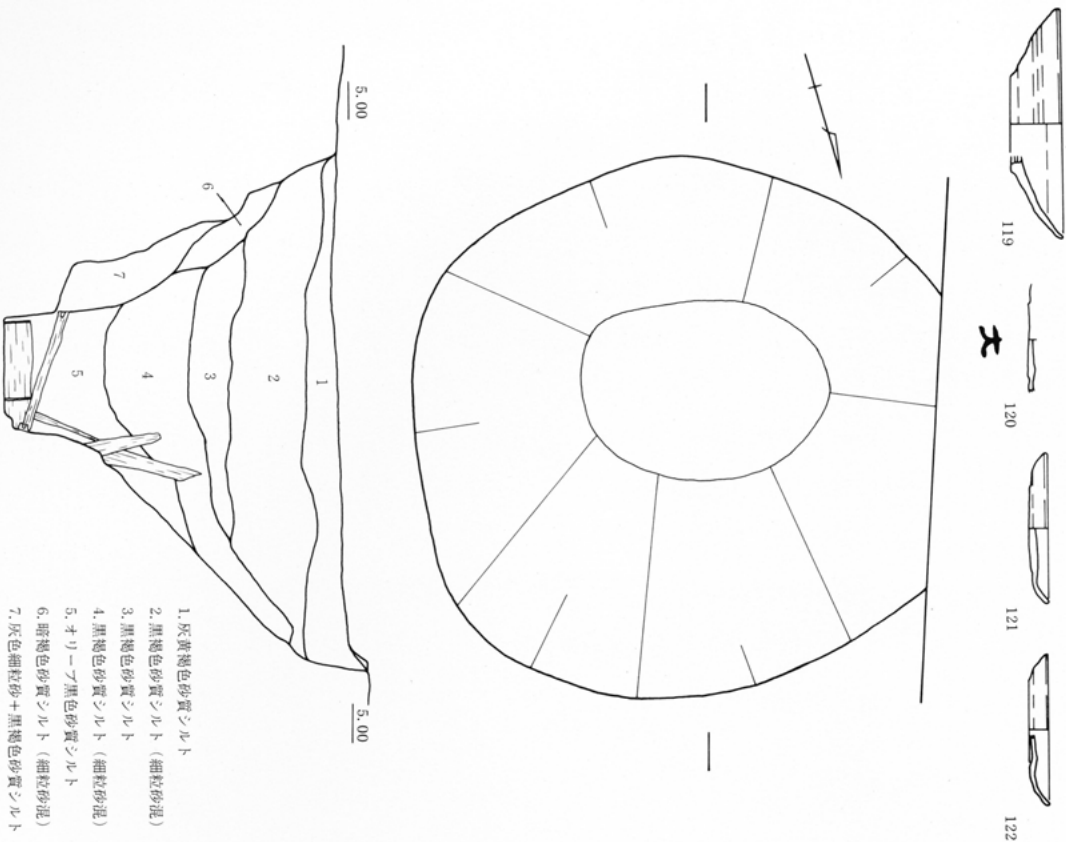
SD07

SD04出土の灰釉系陶器がいわゆる北部系のものが中心だったのに対して、SD07ではやはり南部系の灰釉系陶器が中心となっている。SD07からは尾張型第5型式新段階の椀（88）、尾張型第6型式もしくは第7型式期の小皿（89）の他、百代寺窯式段階の椀（90）が出土している。

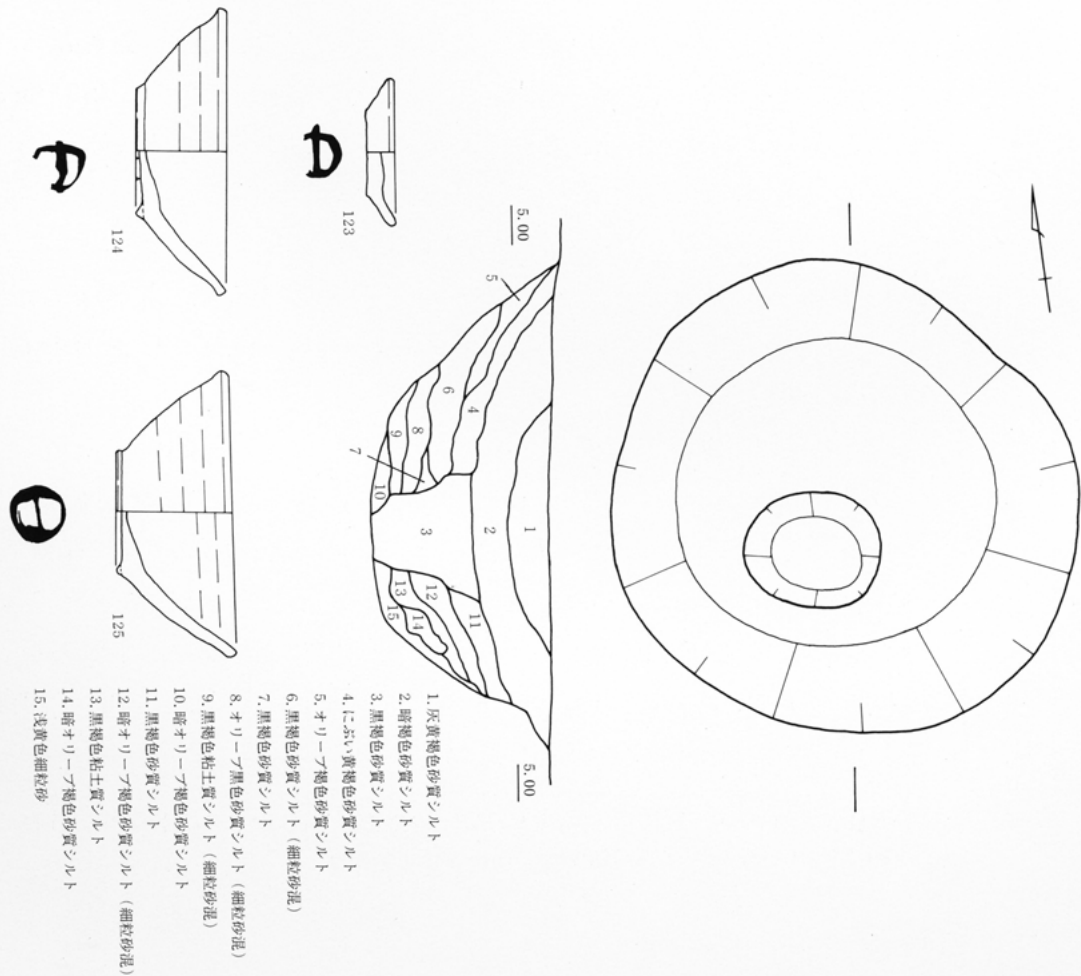
一方SD04～07に直交する南北方向の溝群だが、東西方向の溝群と比べると、全体的に溝の規模も小さく、遺物量もかなり少なくなっている。



第20図 中世遺物実測図3



第21図 SE02遺構図 (1/40) および出土遺物 (1/4)



第22図 SE04遺構図 (1/40) および出土遺物 (1/4)

SD22 そういった中で目を引くのが幅150cm、深さ65cmのSD22で、ここからは土師器皿がまとまって出土している(93、94、96～98)。これらはいずれも口径10～12cm、器高1.5～1.7cmの手づくねの皿で、口縁部外面を横ナデしているタイプである。またSD22からは墨書土器も1点出土している(95)。

次に、東西方向および南北方向の溝群に囲まれた区域について見ていきたい。

A区中央部分の西壁付近では、南北方向に並ぶような形で井戸がまとまって見られるが、基本層序のところで述べたようにこれらの井戸がある辺りはもともと高くなっていた可能性がある。実際に井戸の周囲には多数のピットやL字型に曲がる溝などがあり、この部分が居住域の中心だったと思われる。

**SE02
SE04**

井戸についてSE02およびSE04を例に詳しく見てみると(第21図および第22図)、径3m、深さ1mほどのSE02に対して、SE04は径2.5m、深さ70cmほどで一回り小さくなっている。どちらの井戸からも墨書土器が出土しているが、SE04が尾張型第6型式期の灰釉系陶器碗(124、125)など、いわゆる南部系のものが主体なのに対して、SE02では東濃型大洞東1号窯式期の灰釉系陶器皿など、いわゆる北部系のものが主体となっている。最初に述べたように、このような遺物の時期的な傾向は遺跡全体で認められるようで、井戸を中心とした居住域の時期は、大きく2時期に分けて考えられそうである。

SD08

SE02と関連した遺構として、SD08～10といった溝がある。このうちSD08は幅270cm、深さ30cmほどで、幅を狭めながら途中で南にL字形に曲がっている。ここからは灰釉系陶器(106～108)、羽釜形の土師器鍋(111、112)の他に、古瀬戸の小壺(109)や青磁碗(110)が出土している。109は口径2.9cm、器高4.1cmで、肩の所に一对の耳がつく小壺で、古瀬戸後期段階のものと思われる。110の青磁碗は底部が厚く、四角形に近い高台を持つものである。大宰府編年の龍泉窯系I類で、体部外面に蓮弁文のないタイプにあたるとと思われる。

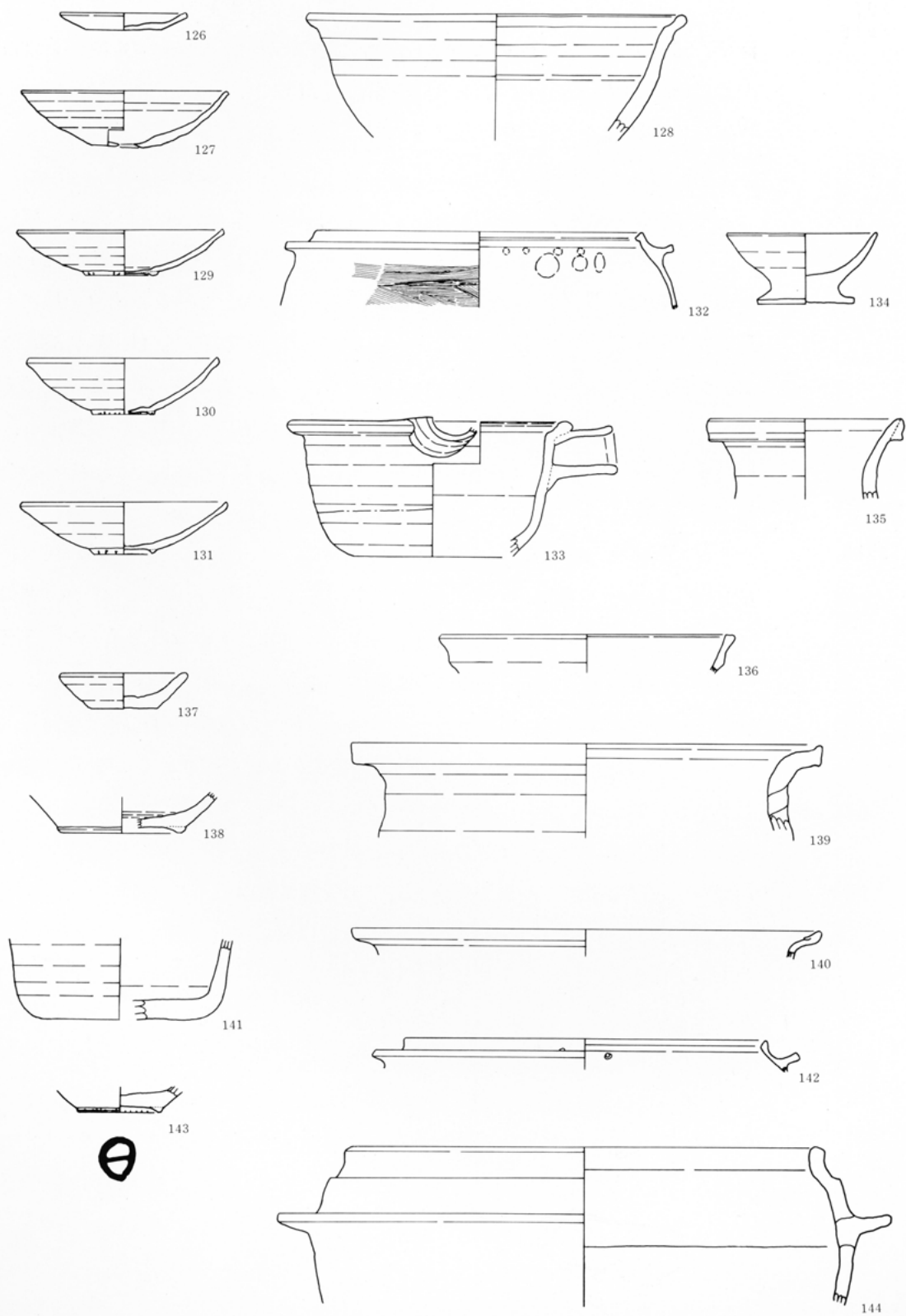
SD09

SD09からは東濃型大洞東1号窯式段階の灰釉系陶器の小皿(113)の他に、羽釜形の土師器鍋(114)が出土している。この鍋は口縁の部分の部分が短く、口縁部が鐙の部分によってほとんど隠れてしまっており、SD08出土のものと比べるとやや新しい段階のものと思われる。

SD10

SD10からは土師器皿(115)、灰釉系陶器の碗(116、117)や鉢(118)が出土している。115は口径8.2cm、器高1.6cmの手づくねの皿で、外面には指頭圧痕が明瞭に残っている。このタイプの土師器皿は、名古屋城三の丸遺跡の下層で古瀬戸後期の遺物と相伴しているが*、115と同じくSD10出土の118も古瀬戸後IV期古段階のもので、口縁部が同時期の古瀬戸の播鉢の口縁部を模しているのが特徴である。SD10からはこの他に砥石が2点出土している(第24図145、146)。石材は共に泥質凝灰岩で、146には細い筋が何本も見られる。

*尾野善裕(1994)「中世・戦国時代の土師器皿の変遷」『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査―遺物編―』名古屋市教育委員会



第23図 中世遺物実測図 4

SD04の南側の区域では、SD73やSD76といった溝のほか、いくつかの土坑が確認されている。

SD73
SD76

SD04の南側を並行して走るSD76は、幅100cm、深さ40cmほどの断面がU字形の溝で、SD08に対応するかのようにL字形に北に曲がる。SD76やSD73からは灰釉系陶器(126、127)や古瀬戸中期の折縁深皿(128)などが出土している。127は東濃型脇之島3号窯式段階の椀だが、その底部は穿孔されている。

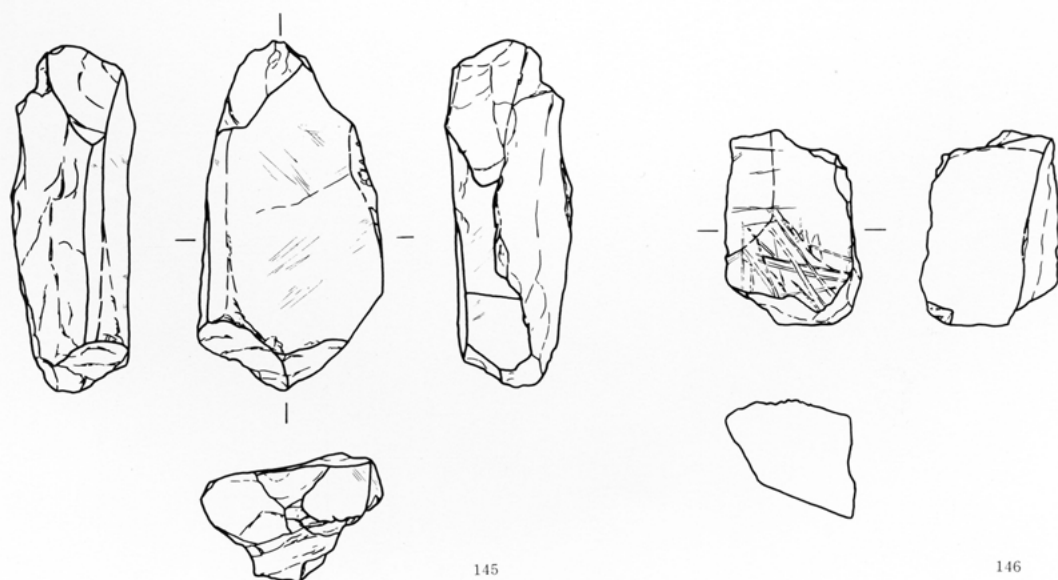
この区域で遺物がまとまって出土しているのはSK60およびSK64である。

SK60

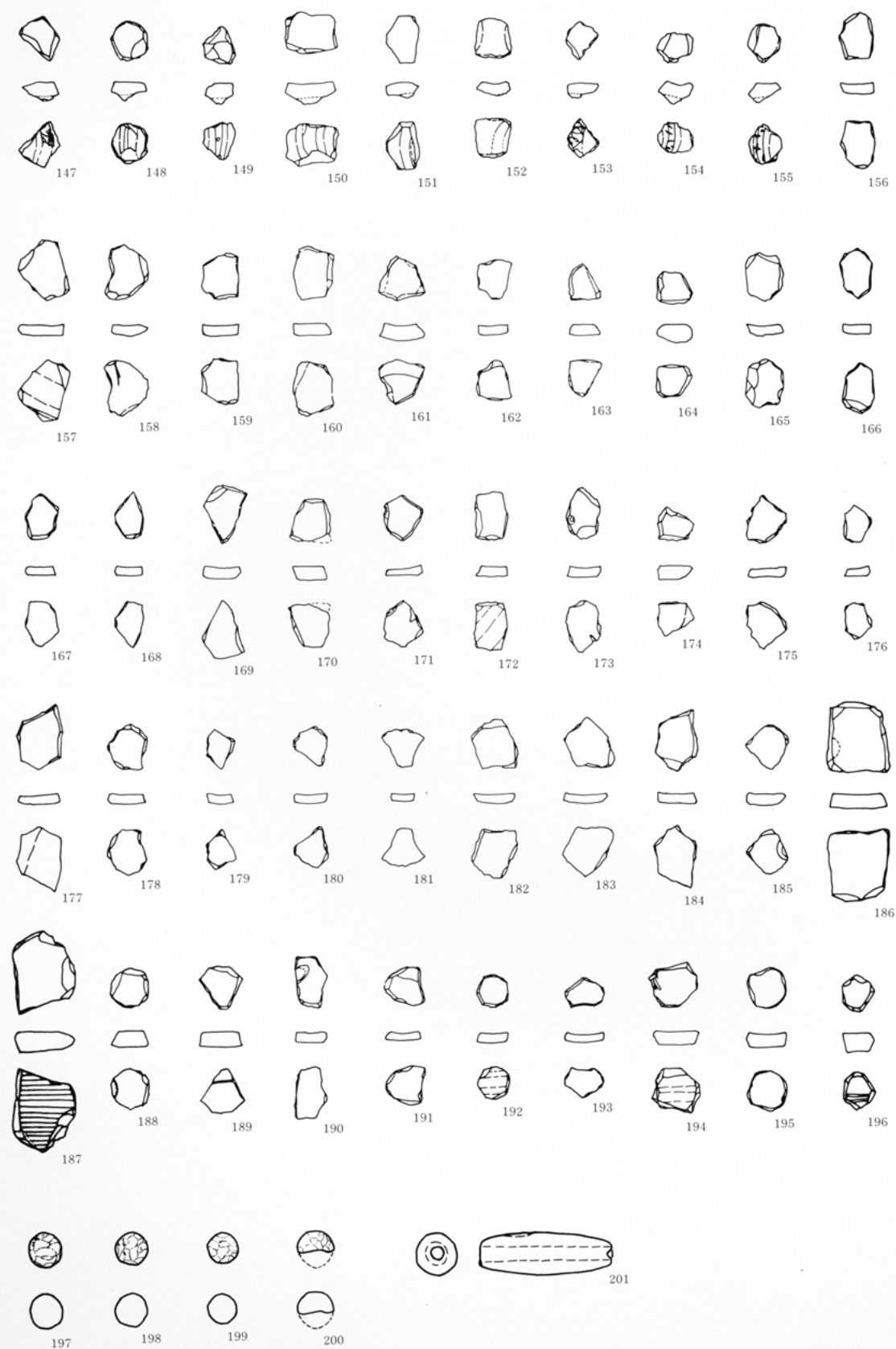
SK60はSD76を切って掘られた長軸285cm、短軸200cm、深さが30cmの楕円形の土坑である。ここからは東濃型大洞東1号窯式段階の灰釉系陶器の椀(129～131)や羽釜形の土師器鍋(132)、陶丸(第25図198～200)といった遺物の他に、東濃型明和1号窯式段階の仏供(134)や、古瀬戸中IV期段階の柄付片口(133)といったやや特殊な遺物が見られるのが特徴である。このうち133の柄付片口には煤が付着しており、鍋として使用されたと思われる。その他にも、古瀬戸後IV期古段階の四耳壺である135には断面に黒い付着物が見られ、漆などによって補修された可能性がある。

SK64

一方SK64は、長軸255cm、短軸133cm、深さが12cmの長方形の土坑である。ここから出土した灰釉系陶器には、美濃須衛窯の製品と思われる椀(138)や小皿(137)が見られる。また古瀬戸中期の柄付片口(141)や前IV期段階の卸皿(136)の他、常滑窯産の12世紀末～13世紀初めの時期の甕(139)や伊勢型鍋(140)も出土している。このうち141の柄付片口は、SK60出土の133よりもやや古い時期のものと思われるが、133と違って煤などの付着は認められなかった。



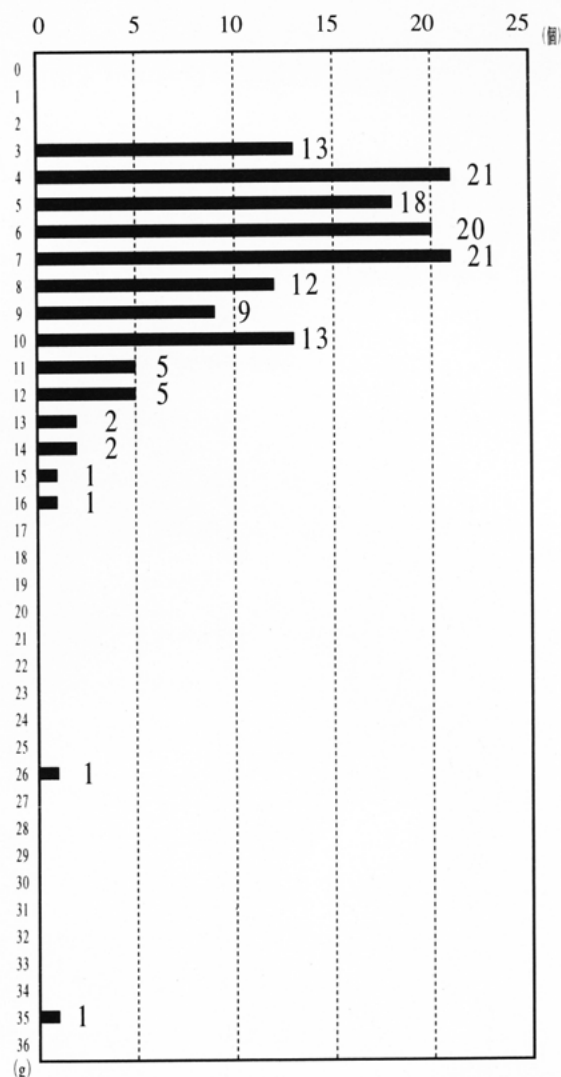
第24図 中世遺物実測図5



第25図 加工円盤・陶丸 (1/4) 土錘 (1/2)

No.	区	遺構	分類	長mm	短mm	重 g	備考
147	A	SD05	A 1a	27	24	(7.1)	一部欠損
148	A	SD08	A 1a	26	24	7.6	
149	A	SD33	A 1a	24	19	5.1	
150	A	SK91	A 1a	33	24	12	
151	A	SD04	A 1b	31	21	6.9	
152	A	SD08	A 1b	26	22	5.9	
153	B	SD22	A 1b	26	19	3.2	
154	B	SD22	A 1b	23	19	4.8	
155	A	SK61	A 1b	26	21	6.2	
156	A	SD04	A 2	31	23	5.3	
157	A	SD04	A 2	40	30	11.4	
158	A	SD07	A 2	36	24	(7.1)	一部欠損
159	A	SD07	A 2	30	24	(6.5)	一部欠損
160	A	SD08	A 2	34	25	9.7	
161	A	SD08	A 2	30	30	9.6	
162	A	SD08	A 2	27	20	4.2	
163	A	SD09	A 2	24	20	(3.8)	半分欠損
164	A	SD09	A 2	23	20	6.0	
165	A	SD16	A 2	30	24	4.8	
166	B	SD21	A 2	34	19	4.7	
167	B	SD21	A 2	30	20	4.0	
168	A	SD10	A 2	32	18	3.3	1ヶ所が尖る
169	A	SD10	A 2	39	25	7.1	1ヶ所が尖る
170	A	SK02	A 2	29	23	6.7	
171	A	SK60	A 2	30	25	4.4	
172	A	SE01	A 2	31	21	7.3	
173	A	SE01	A 2	34	22	5.4	1ヶ所が尖る
174	A	SE01	A 2	25	19	4.5	
175	A	SE02	A 2	31	25	5.1	1ヶ所が尖る
176	A	SE02	A 2	24	17	2.7	
177	A	SE02	A 2	37	28	8.2	
178	A	SE03	A 2	30	25	5.4	
179	A	SE03	A 2	24	17	2.9	1ヶ所が尖る
180	A	SE03	A 2	26	22	2.8	1ヶ所が尖る
181	A	SE03	A 2	(25)	(26)	(3.8)	一部欠損
182	A	SE04	A 2	31	28	6.6	
183	A	SE04	A 2	32	29	6.6	
184	A	SE04	A 2	37	25	7.4	1ヶ所が尖る
185	A	SX01	A 2	29	26	4.7	
186	A	SD04	B	46	37	25.6	
187	A	SD04	B	50	40	34.8	須恵器・胴部
188	A	SD04	C 1	26	24	8.5	須恵器・胴部
189	A	SD04	C 1	29	28	8.4	
190	A	SK60	C 1	32	20	7.3	
191	B	SD28	D 1	26	23	4.0	
192	A	SK91	D 1	21	21	3.8	青磁
193	A	SD04	D 1	26	19	2.8	
194	A	SD11	D 2	30	27	10.4	一部のみ研磨
195	B	SD28	D 2	26	26	7.7	
196	A	SD05	D 2	25	20	6.9	一部のみ研磨

第1表 加工円盤一覧表



第26図 度数分布

分類	個数	長(mm)	短(mm)	重(g)
A1a	18	29.5	24.1	8.6
A1b	12	25.5	24.1	7.2
A 2	65	29.2	23.7	6.0
B	2	48.0	38.5	30.2
C 1	6	28.3	23.8	7.9
C 2	1	23.0	21.0	6.1
D 1	46	25.7	21.9	5.4
D 2	12	26.3	24.0	7.2
全体	162	27.9	23.4	6.8

第2表 加工円盤平均値

SK93 SK93からは羽釜型の土師器鍋（142）が出土しているが、口縁端部の面取りの仕方は、これまで見てきた他の羽釜型土師器鍋が口縁端部を内側に折り返すようにしているのとはやや異なり、やや上方に立ち上がっている。

SK91 SK91からは常滑窯産の羽釜（144）が出土している。12世紀後半のものと考えられる。

加工円盤 その他のこの時期の遺物としては加工円盤（147～196）があるが、以下のように分類した。

A 1 a 類 : 灰釉系陶器碗・皿の高台部を打製加工し、高台部がほぼ中央に位置するもの

A 1 b 類 : 灰釉系陶器碗・皿の高台部を打製加工し、高台部は一方にかたよるもの

A 2 類 : 灰釉系陶器碗・皿の高台部以外を素材とするものすべて（打製加工）

B 類 : 須恵器を打製加工したもの

C 1 類 : 焼締陶器を打製加工したもの

C 2 類 : 焼締陶器を磨製加工したもの

D 1 類 : 施釉陶器を打製加工したもの

D 2 類 : 施釉陶器を磨製加工したもの

これらのデータとして重量別の度数分布を第26図に、一覧表を第1表に、各分類の平均値を第2表に示しておいた。

図示したものの中には、円盤と言いながら鋭利な角を持つものがいくつかある。「1ヶ所が尖る」としたもので、本来ならば加工円盤の範疇に入らないものかもしれない。ただこれらについても他の部分は丸く加工しており、尖った部分についても、そこを落とせばそれで円盤状になることから加えることにした。実際、1ヶ所尖っていたところで投げたりするには全く支障はないし、最後の1行程を省略したとも考えられるからである。

加工円盤の分類については赤塚次郎編（1987）『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎編（1994）『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター等を参考にした。

IV 自然科学分析

『花粉・珪藻微化石分析からみた古環境』

1. 試料と方法

試料

本章では土坑や溝から採取した土壌の花粉・珪藻微化石分析を通して、東茱安賀道遺跡における古環境情報の抽出を試みた。分析試料は95A区（第9図 遺構図3）のSD82より10点（第27図）、SK67より7点（第28図）、SX01より3点（第29図）を採取した。なお、SD82およびSK67についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

珪藻分析方法

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施し、珪藻化石を濃集した。希釈後、カバーガラスに滴下し乾燥させ、プリウラックスで封入し、プレパラートを作製した。油浸600倍あるいは1000倍の光学顕微鏡で行ない、200個体以上を同定・計数した。種の同定にはK. Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K. Krammer (1992) などを用い、堆積環境の解析には小杉(1988)、安藤(1990)、伊藤・堀内(1991)、Asai, K. & Watanabe, T. (1995) の環境指標種を参考とした。

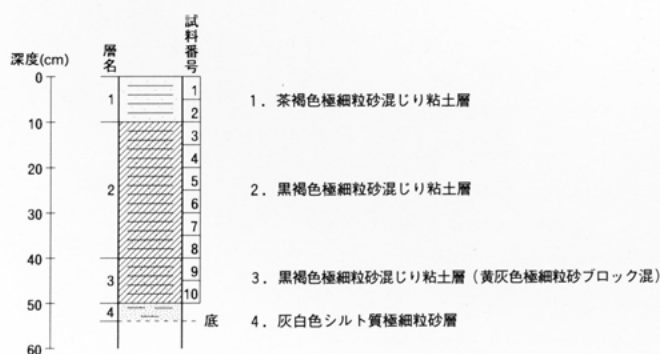
花粉分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、飾別、重液（臭化亜鉛：比重2.13）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集した。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下で出現する全ての種類について同定・計数した。出現率の算出において、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として用いた。

2. 結果

珪藻群集の結果

SD82において出現した珪藻遺骸は32属207種である。生態性は各試料とも近似し、塩分不定性種、真・好アルカリ性種と不定性種、流水不定性種が優占する。種構成の違いによって3つの珪藻帯に区分され、I帯（試料番号10・9）では流水不定性



第27図 95A区SD82試料採取断面柱状図

第28図 95A区SK67試料採取断面柱状図

のGomphonema parvulum が10%と多産し、同じ生態性のFrustulia vulgaris、Navicula elginensis、陸生珪藻のHantzschia amphioxysなどを伴う。Ⅱ帯（試料番号8～3）では陸生珪藻のHantzschia amphioxys、流水不定性のGomphonema parvulum が10%と多産し、好流水性で中～下流性河川指標種群のMeridion circularae var. constrictum、流水不定性のCymbella silesiaca、Navicula elginensis、Rhopalodia gibberula、陸生珪藻A群のNavicula muticaを伴う。Ⅲ帯（試料番号2・1）では、淡水浮遊性で湖沼沼沢湿地指標種群のAulacoseira ambigua、流水不定性のCymbella silesiaca、Gomphonema parvulumが10%と多産し、流水不定性のPinnularia viridis、Rhopalodia gibberulaを伴う。また、陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻がいずれの試料も30%前後産出する（第30図）。

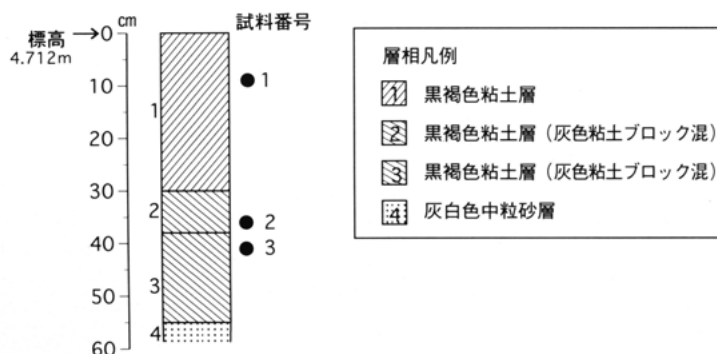
SK67では24属131種の珪藻殻が同定される。生態性では塩分不定性種、真・好アルカリ性種、真・好止水性種が優占する。SK67を埋積する下位層から上位層（試料番号7～1）にかけて、浮遊性種のAulacoseira ambiguaが30～70%と優占し、これに付随して同じく浮遊性種のAulacoseira italica、好止水性種のAnomoeoneis brachysira、Cymbella amphioxya、Fragilaria construens fo. venter、Frustulia rhomboides var. saxonica、流水不定性種のCymbella naviculiformis、C. silesiaca、Gomphonema parvulum、Navicula pupulaを伴う（第31図）。

SX01において出現した珪藻遺骸は18属42種（3変種を含む）である。試料3では珪藻殻の保存状態が悪く200個体を計数できなかった。生態性では止水性種あるいは流水性種、底生種・付着生種や浮遊性種がほぼ同じ割合で検出される混合群集の形態を示す。特徴種はSK67と同様に、浮遊性・止水性種のAulacoseira ambiguaが9.5～16.5%と優占する。付随して付着生種のCymbella minuta、C. turgidula、Frustulia rhomboides、Fragilaria ulnaや底生種のPinnularia gibba、Pinnularia viridisなどを伴う（第4表）。

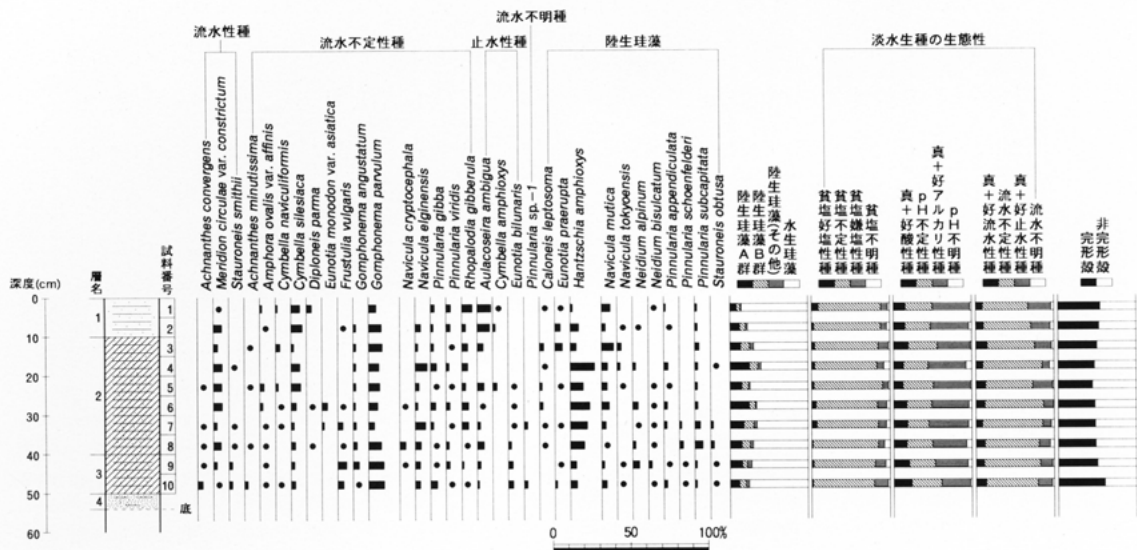
花粉群集の結果

SD82では花粉・胞子化石の保存状態が全試料において不良で、検出化石数が非常に少ない。わずかにマツ属、イネ科、ヨモギ属などが検出されるのみである（第3表）。

SK67でも花粉・胞子化石の保存状態は全体にやや悪く、各試料でシダ類胞子の検出率が高い。試料番号7はほとんど無化石である。木本花粉では特に優占する種類はなく、アカガシ亜属、コナラ亜属、マツ属、ツガ属、コウヤマキ属などが20～30%ず



第29図 95A区SX01試料採取断面柱状図



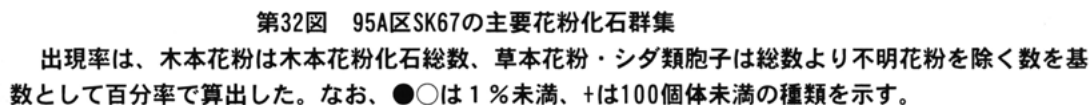
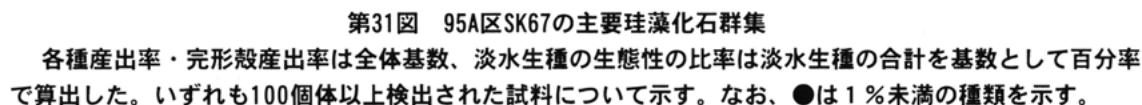
第30図 95A区SD82の主要珪藻化石群集

各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の種類を示す。

種 類	試料番号									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉										
ツガ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
マツ属	12	3	-	2	1	1	-	-	1	1
ヤマモモ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
カバノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
ブナ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	1	-	-	1	-	1	-	2	1	1
コナラ属アカガシ亜属	3	-	-	-	-	-	1	1	-	1
ニレ属-ケヤキ属	3	1	-	-	-	-	-	-	-	1
エノキ属-ムクノキ属	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-
カキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉										
サジオモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ科	56	1	-	-	-	7	7	3	7	17
カヤツリグサ科	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	-	-	-	-	-	1	1	-	3
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	1	-	-	-	-	2	4	1	3	10
他のキク亜科	-	1	-	1	2	1	-	1	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	1	-	5	5	1	1	5
不明花粉	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-
シダ類胞子	76	188	85	64	80	81	113	46	44	106
合 計										
木本花粉	23	6	0	3	4	3	2	3	3	7
草本花粉	59	2	0	2	2	16	18	7	12	37
不明花粉	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0
シダ類胞子	76	188	85	64	80	81	113	46	44	106
総計 (不明を除く)	158	196	85	69	86	100	133	56	59	150

第 3 表 95A区SD82花粉分析結果

つ検出される。草本ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節などが随伴する。試料番号4~1でソバ属が検出される (第32図)。



出土遺物から古墳時代と推定される溝SD82からは、全層準にわたって *Pinnularia subcapitata*、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys* などの陸生珪藻が多産した。

試料 番号	特徴種	出現数/全個体数	出現率(%)
1	<i>Aulacoseira ambigua</i>	33/200	16.5
	<i>Cymbella minuta</i>	21/200	10.5
	<i>Frustulia rhomboides</i>	18/200	9.0
	<i>Pinnularia gibba</i>	14/200	7.0
2	<i>Aulacoseira ambigua</i>	19/200	9.5
	<i>Cymbella minuta</i>	17/200	8.5
	<i>Pinnularia viridis</i>	17/200	8.5
	<i>Frustulia rhomboides</i>	14/200	7.0
3	<i>Gomphonema parvulum</i>	5/27	18.5
	<i>Cymbella turgidula</i>	4/27	14.8
	<i>Fragilaria ulna</i>	4/27	14.8

第4表 95A区SX01から確認される珪藻の特徴種

陸生珪藻は、陸上のコケや土壌表面などの多少の湿り気を保持した環境ならば生育可能な種群である。その中でも *Hantzschia amphioxys* は耐乾性の強い陸生珪藻の一種である（伊藤・堀内、1991）。本種が2層において優占する事実は、陸上の好気的場所からこれらの微化石を含んだ土壌が堆積したか、あるいは溝の内部には水がなく好気的な時期を経験していることを示す。

中世の土坑であるSK67を埋積する堆積物からは *Anomoeoneis brachysira*、*Fragilaria construens* fo. *venter*、*Frustulia rhomboides* var. *saxonica* や *Aulacoseira ambigua*、*Aulacoseira italica* といった止水性種が優占した。特に *Aulacoseira ambigua* は全層準から30～50%と高い出現率を示す。また、同じく中世の土坑SX01でも *Aulacoseira ambigua* が優占した。*Aulacoseira* 属は浮遊性の珪藻であり、山間の池沼やダム湖、平地の溜め池といった水深のある止水域に生息するものである（Shiono, M. & Richard W. Jordan, 1995、渡辺・金近、1986）。遺構が掘削されてから堆積物により埋積されてしまうまでの期間、これらの土坑は、ある程度の水深を保った滞水環境であったことを示唆する。また、付随する *Anomoeoneis brachysira*、*Frustulia rhomboides* var. *saxonica*、*Cymbella naviculiformis*、*C. turgidula*、*Fragilaria ulna* などは、沼よりも浅く水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢やさらに水深の浅い湿地に生育する沼沢湿地付着生種群である。当時の土坑周辺には水生植物が繁茂していたことがうかがえる。考古学的にも居住域から隔たった湿地部と推定されており矛盾しない。

花粉分析では、3層において主としてコナラ亜属やアカガシ亜属が優占するので、夏緑広葉樹や常緑広葉樹といった照葉樹林が近くに形成されていた可能性がある。上位の2層ではコナラ亜属・アカガシ亜属が減少し、マツ属が増加する。照葉樹林が縮小し、代わってマツ林が拡大したと推定される。また、全層準にわたってイネ科、カヤツリグサ科がみられることから湿生草原が広がっていた。同時に、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属、サジオモダカ属といった抽水植物・浮葉植物の花粉も出現す

るため、湿地化していたと推定される。イネ科の出現率が高いのも湿地あるいは池沼に生育するイネ科抽水植物の存在に起因すると考えられる。また、路上雑草であるヨモギ属やタンポポ科といった花粉化石がみられることや、木本花粉に比べて草本花粉の占める割合が高いことから、集落が形成または拡張されたのに伴い、周辺は開けた環境になったのがわかる。畑作物であるソバ属やマメ科、畑地雑草を含む分類群であるナデシコ科といった花粉もみられ、土坑埋積時には近傍に畑地も広がっていたと推定される。

文献

- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa, *Diatom*, 10, 35-47.
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, *東北地理*, 42, 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, *珪藻学会誌*, 6, 23-45.
- 近藤鍊三・佐瀬隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, *第四紀研究*, 25, 31-64.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用, *第四紀研究*, 27, 1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1986, *Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae*. Band 2/1 von: *Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*, Gustav Fischer Verlag., 876p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae*. Band 2/2 von: *Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*, Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae, Teil 3, Epithemiaceae Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae*. Band 2/3 von: *Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*, Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema*. Band 2/4 von: *Die Suesswasserflora von Mitteleuropa*, Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Krammer, K. 1992, *PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa*. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA Band 26, BERLIN-STUTTGART., 1-353.
- Shiono M. and Richard W. Jordan, 1995, Recent diatoms of Lake Hibara, Fukushima Prefecture, *Diatom*, 11, 31-63.
- 渡辺仁治・金近美佐子, 1986, DAIpoの止水域への適応-奈良県室生ダム湖の場合-, *Diatom*, 2, 153-162.
- 付記: 詳しい分析値については、希望があれば直接著者に問い合わせ願いたい。

V まとめ

1. 今回の調査について

今回の調査では、古墳時代および中世の遺構と遺物を確認することができた。

古墳時代の遺構としては、SD32、SD43、SD52 といった一連の溝がポイントとなってくると思われ、SD32の北側には居住域が展開していた可能性がありそうである。中世の東荊安賀道遺跡については後で詳しくふれることにする。

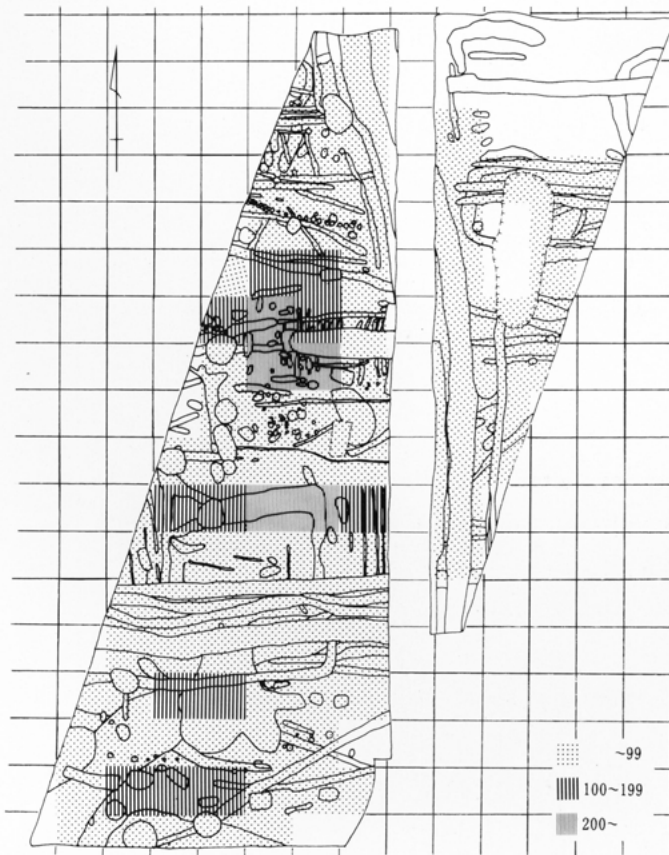
縄文時代については遺構は確認できなかったものの、突帯紋期の遺物が若干出土している。遺物は基本的に流れ込みによるものと考えられるが、東荊安賀道遺跡の南約500mに位置する馬引横手遺跡では、縄文時代晩期に埋没したと考えられる谷地形が確認され、やはり遺構は伴わないものの若干の遺物が出土している。今後この地域の発掘調査をするにあたっては、縄文時代の遺構の存在も考えていく必要があるだろう。

2. 中世の東荊安賀道遺跡の状況について

中世の段階の東荊安賀道遺跡の状況については、遺構の分布や基本層序などを参考に、SD04などの東西方向の溝とSD22などの南北方向の溝とに囲まれたA区中央部の井戸のある辺りを居住域と推定した。しかしながら古墳時代と中世の遺構が重なり合っている上、この部分の遺構からはほとんど遺物が出土しておらず、古墳時代の遺構である可能性も否定できない。

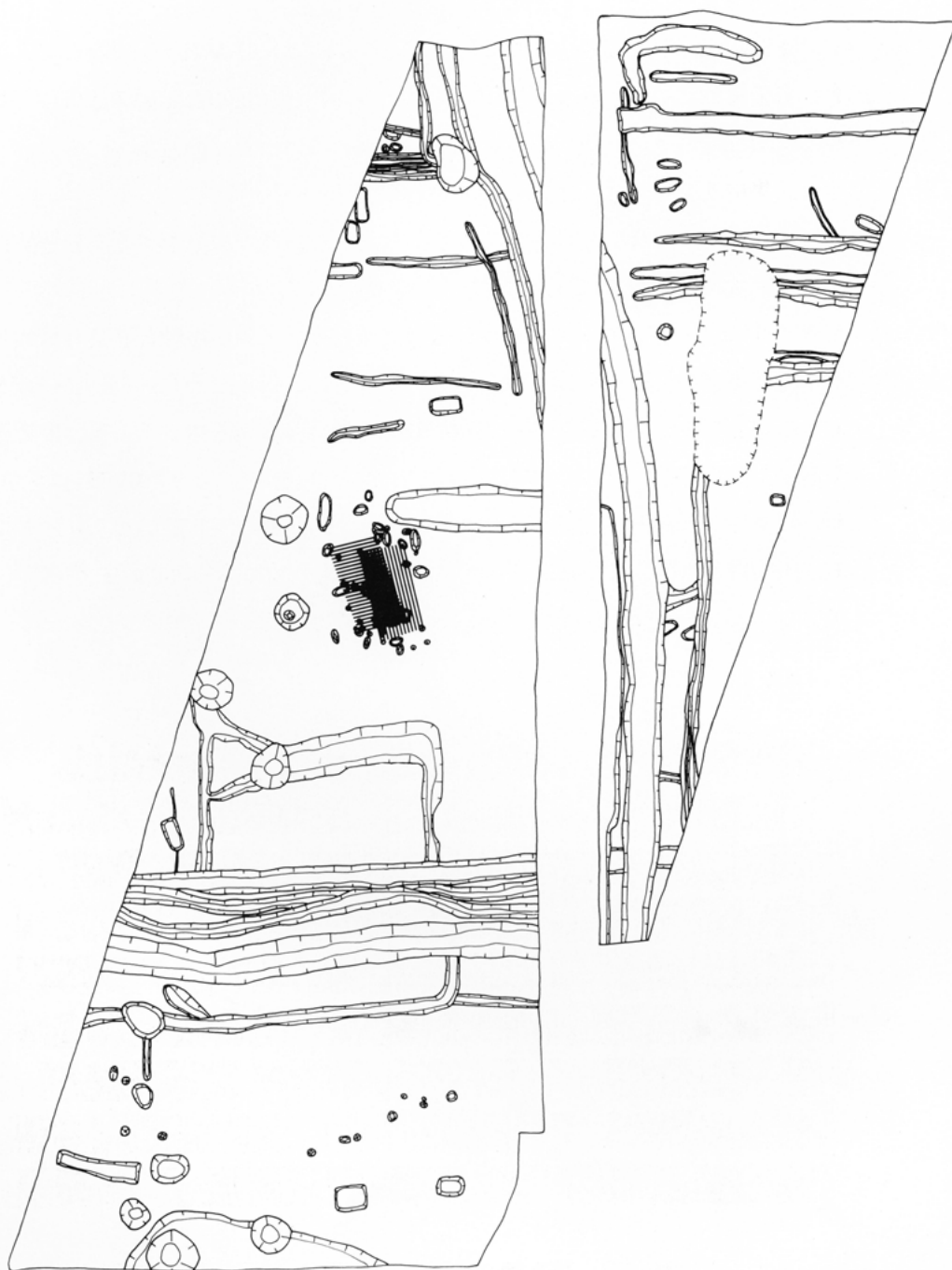
そこで包含層出土の遺物の出土頻度を遺構図に重ねてみたのが第33図である。もちろん包含層中からの出土ということで当時の位置そのまま出土したわけではないが、全く別の場所に動かしたのであれば、ある程度の範囲内でとらえることができるのではないだろうか。そういった前提のもとに遺物の量を比較することで、何らかの傾向をうかがうことができるのではないかと考えた。

第33図では5mグリッドごとの包含層出土の中世の遺物の量（表土はぎ後の遺構検出段階の遺物）を示し



第33図 遺物出土頻度 (1/800)

た。これを見ると調査区全体に均等に遺物が分布しているのではなく、何ヶ所か遺物の集中地点があることがわかる。いずれもA区で、SD04の南側の区域とSD08の周辺区域、そしてSE03の西側の区域の3ヶ所である。対照的に、遺構のあまりないB区では全体的に遺物も少ないのだが、特に北側部分では包含層もあまり認められ



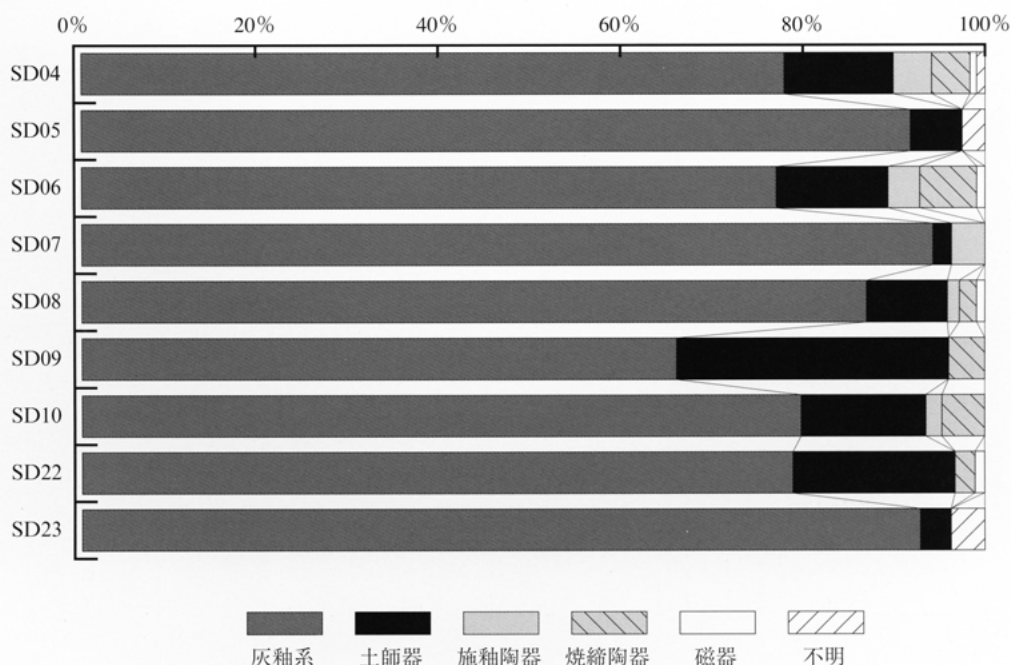
第34図 中世遺構配置図 (1/500)

ず、また遺構内からもほとんど遺物は出土していない。

SD04の南側は、SD75やSX01の状況から、湿地的な環境にあったと考えられる。SD75やSX01からはいろいろな時期の遺物が混在して出土しており、周囲から遺物が流れ込んできたものと思われる。ということは、包含層出土の遺物の量が比較的多い理由も、低くなったこの部分に土砂とともに遺物が流れ込んできた結果だと考えるのが妥当であろう。

ではSD08やSE03の周辺区域はどうだろうか。A区は南側が低くなっているのに対して全体的に北側が高くなっているのだが、中でもSE03などの周辺は部分的にやや高くなっていた可能性がある。遺物が集中するのはその周辺部分に当たり、井戸などが集中する区域とも重なってくる。

このように包含層出土の遺物の分布から見ても、井戸の集中する部分を居住域の中心と考えて良さそうである。そしてほとんど遺物が出土していない井戸周辺のピット群についても遺物集中地点と重なっており、中世の段階の遺構の可能性が高そうである。またB区のSD21がL字状に曲がってA区に続くとなると、SD08に対応するような位置関係となり、ともに遺物の集中地点と重なってくる。出土遺物の時期については尾張型第5型式と東濃型大洞東1号窯の2つの時期にピークがあり、それに対応するかのようにL字形の溝があるという形になっている。井戸についても尾張型の灰釉系陶器が主体となるSE04と東濃型の灰釉系陶器が主体となるSE02があり、同じように2時期に分かれるようである。



第35図 遺物組成グラフ

以上の結果をまとめたのが第34図である。SD04などの東西方向の溝とSD22などの南北方向の溝に囲まれた区域に、L字形の溝とともに井戸やピット群（掘立柱建物）が位置する居住域を想定した。そして遺跡の中心はこの部分から西側に展開してくると考えられる。

3. 東苅安賀道遺跡の中世の遺物の組成について

東西方向の溝であるSD04～SD10や、南北方向のSD22～SD23は居住域を囲む溝と考えられ、比較的遺物の量も多い。そこで東苅安賀道遺跡の遺物の傾向を見るためにそこから出土した遺物の総破片数（接合前）をカウントし、まとめたのが第35図のグラフである。

遺物の数量化にはいくつかの方法があるが、今回は総破片数を用いた。遺物の絶対量が少なく、例えば口縁部計測法などを採用しても結果が出ないというのが最も大きな理由である。少しでも母数を大きくとった方がデータとしては信頼性が高まるはずであるし、基本的な傾向というのは十分つかめると考えたからである。ただ細かく時期を特定できなかったため、時期幅はかなり大きくなってしまった。

そういった点を考慮に入れた上で改めて第35図を見ると、遺物の大半は灰釉系陶器（椀・皿）が占め、土師器（皿・鍋）、施釉陶器（古瀬戸製品）、焼締陶器（常滑製品）に輸入陶磁器が少数加わるという、尾張地域の中世の遺跡の基本パターンを示している。

ただし細かく見ると、時期的には東濃型大洞東1号窯式（古瀬戸後Ⅱ・Ⅲ期）の段階まで含んでいるわけだが、その割には施釉陶器の割合が低いと思われる。東苅安賀道遺跡出土の古瀬戸製品は、古瀬戸の流通量の増加と逆行するかのように中期の製品が主体で、後期の製品が少ないためと考えられる。また全体的に常滑製品が少ないという傾向はうかがえそうである。

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SK 1										SD10の一部
SK 2	420	290	54	U	楕円形	10YR4/2 粘土質シルト	A	VIG 18 h	中世	
SK 3	240	85	12	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 19 g	中世	
SK 4	157	100	7	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 20 g	中世	
SK 5		100	13	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 20 g	中世	
SK 6	50	50	23	逆台形	円形	7.5YR2/1 粘土質シルト	A	VIG 19 h	中世	
SK 7	109	109	16	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VIG 20 g	古墳	
SK 8		35	12	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 20 g	中世	
SK 9	150	150	90	逆台形	円形	10YR3/2 粘土質シルト	A	VIG 1 g	古墳	
SK 10	170	165	25	U	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 1 f	古墳	
SK 11	100	100	30	皿	円形	10YR4/2シルト	B	VIG 1 k	中世	
SK 12	220	125	50	逆台形	長方形	10YR4/2シルト + 10YR5/2 細粒砂	A	VIG 2 h	中世	
SK 13		110	10	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 3 f	古墳	
SK 14		72	11	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 3 f	古墳	
SK 15	385	167	54	U	長方形	10YR3/2シルト	A	VIG 5 f	古墳	
SK 16	150	130	18	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 6 f	古墳	
SK 17	157	129	18	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 5 f	古墳	
SK 18	85	28	20	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 5 g	中世	
SK 19	70	42	44	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 5 h	中世	
SK 20	97	30	31	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 5 g	中世	
SK 21	150	58	35	U	長方形	10YR3/2シルト	A	VIG 5 g	古墳	
SK 22	54	50	26	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 5 g	中世	
SK 23	35	35	7	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VIG 5 g	中世	
SK 24	30	30	5	皿	円形	7.5YR2/1 粘土質シルト	A	VIG 5 g	中世	
SK 25	204	148	38	U	長方形	10YR4/2シルト + 10YR5/2 細粒砂	A	VIG 13 h	中世	
SK 26	208	100	17	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 13 f	中世	
SK 27	230	176	10	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 13 g	中世	
SK 28										欠番
SK 29										欠番
SK 30	100	60	1	皿	楕円形	10YR4/2シルト	B	VIG 19 k	中世	
SK 31	165	50	1	皿	楕円形	10YR4/2シルト	B	VIG 19 k	中世	
SK 32	190	85	1	皿	楕円形	10YR4/2シルト	B	VIG 19 k	中世	
SK 33	120	65	3	皿	楕円形	10YR4/2シルト	B	VIG 19 l	中世	
SK 34	150	100	20	皿	長方形	10YR3/2シルト	B	VIG 4 l	古墳	
SK 35	190	80	15	皿	長方形	10YR4/2シルト	B	VIG 20 n	中世	
SK 36	115	100	40	逆台形	長方形	10YR4/2シルト / 10YR3/2シルト	A	VIG 3 m	中世	
SK 37		90	2	皿	楕円形?	10YR4/2シルト	A	VIG 5 k	中世	
SK 38		100		皿	楕円形?	10YR4/2シルト	A	VIG 5 l	中世	
SK 39		100		皿	長方形?	10YR3/2シルト	A	VIG 6 l	古墳	
SK 40		50	18	U	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 20 g	古墳	
SK 41	100	90	7	皿	長方形	10YR3/2シルト	A	VIG 1 h	古墳	
SK 42		122	11	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 18 g	中世	
SK 43	90	60	17	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 18 h	中世	
SK 44	70	55	19	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 18 g	中世	
SK 45	90	90	40	逆台形	円形	10YR4/2シルト	A	VIG 19 h	中世	
SK 46	60	50	12	皿	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 19 h	中世	
SK 47		67	13	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 19 g	古墳	
SK 48	65	46	13	U	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 20 g	古墳	
SK 49	41	32	8	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 20 g	古墳	
SK 50		130	12	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 19 h	古墳	
SK 51		58	8	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VIG 20 g	古墳	
SK 52	215	130	9	皿	長方形	10YR3/2シルト	A	VIG 6 f	古墳	
SK 53	200	100	12	皿	長方形	10YR3/2シルト	A	VIG 6 h	古墳	
SK 54	190	120	25	U	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 6 f	古墳	
SK 55	21	21	4	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VIG 4 g	古墳	
SK 56	175	85	26	U	楕円形	7.5YR2/1 粘土質シルト	A	VIG 7 h	古墳	
SK 57	240	120	18	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VIG 8 d	中世	
SK 58	230	100	9	皿	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 8 g	古墳	
SK 59		50	20	U	楕円形	10YR3/2シルト	A	VIG 10 f	古墳	
SK 60	285	200	30	U	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 11 d	中世	
SK 61	60	47	45	逆台形	楕円形	10YR4/2シルト	A	VIG 11 c	中世	
SK 62	54	50	51	逆台形	円形	10YR4/2シルト	A	VIG 12 d	中世	

東荊安賀道遺跡

遺構番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SK 63	146	125	9	皿	楕円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 d	中世	
SK 64	255	133	12	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VII G 13 e	中世	
SK 65	218	200	69	U	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 13 d		
SK 66	282	204	58	U	楕円形	10YR4/2シルト + 10YR5/2細粒砂	A	VII G 13 d	中世	
SK 67	142	132	66	U	楕円形	10YR3/2粘土質シルト	A	VII G 11 h		
SK 68	46	46	40	逆台形	円形	10YR4/2砂質シルト(炭化物含む)	A	VII G 12 d	中世	
SK 69		124	34	U	楕円形	7.5YR2/1粘土質シルト	A	VII G 11 g		
SK 70										欠番
SK 71	592	154	53	逆台形	長方形	10YR4/2シルト + 10YR5/2細粒砂	A	VII G 13 c	中世	
SK 72										欠番
SK 73	62	48	20	U	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 d	中世	
SK 74	30	28	21	U	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 d	中世	
SK 75	38	34	42	U	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 e	中世	
SK 76	28	24	24	U	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 13 e	中世	
SK 77	30	26	38	U	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 e	中世	
SK 78	28	28	12	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 e	中世	
SK 79	60	40	13	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 13 f	中世	
SK 80	46	38	8	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VII G 13 f	古墳	
SK 81	80	42	7	皿	長方形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 g	中世	
SK 82	46	38	7	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 g	中世	
SK 83	38	38	7	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 g	中世	
SK 84	64	60	12	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 g	中世	
SK 85	34	28	9	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 h	中世	
SK 86	34	22	5	皿	楕円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 h	中世	
SK 87	52	46	14	皿	楕円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 h	中世	
SK 88	74	72	9	皿	円形	10YR4/2シルト	A	VII G 12 h	中世	
SK 89	74	70	14	皿	方形	10YR3/2シルト + 10YR4/2シルト	A	VII G 13 e	古墳	
SK 90	156	146	13	皿	方形	10YR3/2シルト	A	VII G 11 h	古墳	
SK 91						10YR4/2シルト	A	VII G 14 d	中世	
SK 92						10YR3/2シルト	A	VII G 1 f	古墳	
SK 93	276	274	79	U	円形	10YR4/2シルト / 10YR3/2シルト	A	VII G 14 f	中世	旧 SE05
SK 94	374	354	108	U	円形	10YR4/2シルト / 10YR3/2シルト	A	VII G 14 d	中世	旧 SE06
SD 1										欠番
SD 2										欠番
SD 3										欠番
SD 4		264	68	U		10YR4/2シルト	A	VII G 10 c	中世	2つの溝が重複
SD 5		196	51	U		10YR4/2シルト	A	VII G 9 d	中世	
SD 6		118	47	U		10YR4/2シルト	A	VII G 9 d	中世	
SD 7		160	37	U		10YR4/2シルト	A	VII G 9 d	中世	
SD 8		274	27	皿		10YR4/2シルト	A	VII G 7 e	中世	
SD 9		88	24	皿		10YR4/2シルト	A	VII G 7 e	中世	
SD 10		146	21	皿		10YR4/2シルト	A	VII G 7 e	中世	
SD 11		110	42	U		10YR4/2粘土質シルト	A	VII G 17 h	中世	
SD 12		70	15	U		10YR4/2シルト	A	VII G 17 h	中世	
SD 13		43	19	U		10YR4/2シルト	A	VII G 18 h	中世	
SD 14		40	31	U		10YR4/2シルト	A	VII G 19 h	中世	
SD 15		47	14	U		10YR3/2シルト	A	VII G 19 h	古墳	
SD 16		76	28	U		10YR4/2シルト	A	VII G 20 g	中世	
SD 17		57	33	U		10YR4/2シルト	A	VII G 19 g	中世	
SD 18		48	9	皿		10YR3/2シルト	A	VII G 1 f	古墳	
SD 19		47	28	U		10YR4/2シルト	A	VII G 20 i	中世	
SD 20		24	8	U		10YR4/2シルト	A	VII G 2 g	中世	
SD 21				逆台形		10YR5/2粘土質シルト	B	VII G 4 k	中世	
SD 22		150	65	U		10YR5/2粘土質シルト	B	VII G 17 i	中世	
SD 23		65	38	U		10YR4/2シルト	B	VII G 3 l	中世	
SD 24		140	35	逆台形		10YR4/2シルト	B	VII G 8 k	中世	
SD 25		100	25	U		10YR4/2シルト	B	VII G 20 k	中世	
SD 26		115	25	U		10YR3/2シルト	B	VII G 20 k	古墳	周溝?
SD 27		100	35	V		10YR4/2シルト	B	VII G 20 k	中世	
SD 28		130	55	U		10YR5/2粘土質シルト / 10YR4/2シルト	B	VII G 20 m	中世	
SD 29		90	30	U		10YR4/2シルト	B	VII G 1 m	中世	SD25 と同一

遺構	番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	埋土	区	グリッド	時期	備考
SD	30		155	15	皿		10YR4/2シルト	B	VIG 18 k	中世	
SD	31		100	35	U		10YR3/2砂質シルト	B	VIG 17 o	古墳	周溝?
SD	32		115	51	U		10YR3/2粘質シルト	A	VIG 1 f	古墳	SD43・52と同一
SD	33		50	13	U		10YR4/2シルト	A	VIG 2 g	中世	ヒットの連続
SD	34		32	14	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 3 f	古墳	
SD	35		76	29	U		10YR3/2シルト	A	VIG 4 f	古墳	
SD	36		98	16	皿		10YR3/2砂質シルト	A	VIG 13 f	古墳	
SD	37		100	40	U		10YR4/2シルト	A	VIG 10 h	中世	
SD	38		130	8	皿		10YR4/2シルト	B	VIG 17 k	中世	
SD	39	626	70				10YR4/2シルト	B	VIG 17 k	中世	
SD	40	820	35	12	皿		10YR4/2シルト	B	VIG 18 k	中世	
SD	41		85	12	皿		10YR3/2シルト	B	VIG 19 l	古墳	周溝の拡張?
SD	42		95	10	皿		10YR4/2シルト	B	VIG 20 k	中世	
SD	43		90	50	U		10YR3/2シルト	B	VIG 3 k	古墳	
SD	44		90	35	U		10YR3/2シルト	B	VIG 3 k	古墳	
SD	45		60				10YR4/2シルト	B	VIG 19 m	中世	
SD	46		70	13	皿		10YR4/2シルト	B	VIG 20 m	中世	
SD	47		55	22	U		10YR3/2シルト	B	VIG 1 n	古墳	
SD	48		55	13	皿		10YR3/2シルト	B	VIG 1 n	古墳	
SD	49		80				10YR3/2シルト	B	VIG 1 m	古墳	
SD	50		60	43	逆台形		10YR4/2シルト	B	VIG 1 m	中世	
SD	51		70	40	U		10YR3/2シルト	B	VIG 3 m	古墳	SD43, 32と同一
SD	52		100	55	U		10YR3/2シルト	B	VIG 3 m	古墳	
SD	53		85	35	U		10YR4/2シルト	B	VIG 5 k	中世	
SD	54		85	10	皿		10YR3/2シルト	B	VIG 6 k	古墳	
SD	55		40	25	U		10YR4/2シルト	B	VIG 6 l	中世	
SD	56		75	30	U		10YR4/2シルト	B	VIG 7 k	中世	
SD	57		50	35	U		10YR3/2シルト	B	VIG 8 k	古墳	
SD	58		50	13	皿		10YR3/2シルト	B	VIG 4 l	古墳	
SD	59		110	27	U		10YR3/2粘土質シルト	A	VIG 18 h	古墳	
SD	60		39	26	U		10YR3/2シルト	A	VIG 19 h	古墳	
SD	61		64	18	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 20 g	古墳	
SD	62		50	18	U		10YR3/2シルト	A	VIG 1 g	古墳	
SD	63		95	14	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 17 h	古墳	
SD	64		36	14	U		10YR4/2シルト	A	VIG 18 g	中世	
SD	65		60	4	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 20 h	古墳	
SD	66		40	12	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 5 h	古墳	
SD	67		135	58	U		10YR3/2シルト	A	VIG 4 f	古墳	
SD	68		250	40	U		7.5YR2/1粘土質シルト	A	VIG 5 h	古墳	
SD	69		35	8	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 7 d	古墳	
SD	70		23	7	皿		10YR4/2シルト	A	VIG 7 d	中世	
SD	71		24	12	U		10YR3/2シルト	A	VIG 8 d	古墳	
SD	72		52	26	逆台形		10YR3/2シルト	A	VIG 9 h	古墳	
SD	73		83	19	U		10YR4/2シルト	A	VIG 10 d	中世	
SD	74		45	13	皿		10YR4/2シルト	A	VIG 11 d	中世	
SD	75		424	24	皿		10YR5/1シルト	A	VIG 10 g	中世?	
SD	76		100	40	U		10YR4/2シルト	A	VIG 11 c	中世	
SD	77										欠番
SD	78		46	6	皿		10YR4/2砂質シルト	A	VIG 11 g	中世	
SD	79		87	18	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 12 g	古墳	
SD	80		45	12	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 12 g	古墳	
SD	81		96	20	皿		10YR3/2シルト	A	VIG 12 e	古墳	
SD	82		90	24	U		10YR3/2シルト	A	VIG 12 i	古墳	
SE	1	328	282	106	U	円形		A	VIG 7 f	中世	
SE	2	302	288	127	U	円形		A	VIG 6 e	中世	
SE	3	346	342	98	U	円形		A	VIG 4 f	中世	
SE	4	252	248	67	U	円形		A	VIG 5 f	中世	
SA	1	60	48	13	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VIG 1 g	古墳	杭列
		48	48	18	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VIG 1 g	古墳	杭列
		52	46	10	皿	円形	10YR3/2シルト	A	VIG 1 g	古墳	杭列

図 No.	登録	時期	器種	口径cm	底径cm	器高cm	区	遺構	備考
10 1	E-1	縄文	深鉢	(23.1)			A	SD75	
10 2	E-2	縄文	深鉢				A	検出Ⅱ	
10 3	E-3	縄文	深鉢				A	SD75	
10 4	E-4	縄文	深鉢				A	SX01	
10 5	E-5	縄文	深鉢				A	SD82	
10 6	E-6	縄文	深鉢				A	検出Ⅰ	
10 7	E-7	縄文	深鉢				A	SD66	
10 8	E-8	縄文	浅鉢				A	検出Ⅱ	
11 9	S-9	縄文	石斧	長 (12.3)	短 7.0	厚 2.2	A	検出Ⅰ	269.0g、結晶片岩、一部欠損
11 10	S-10	縄文	石斧	長 9.6	短 4.5	厚 2.1	A	検出Ⅰ	146.0g、変塩基性岩
11 11	S-11	縄文	石鏃	長 24.0	短 15.0	厚 4.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 1.1g、チャート
11 12	S-12	縄文	石鏃	長 23.0	短 15.0	厚 4.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 0.8g、サヌカイト
11 13	S-13	縄文	石鏃	長 21.0	短 13.5	厚 3.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 0.9g、下呂石
11 14	S-14	縄文	石鏃	長 16.5	短 13.5	厚 3.5	A	検出Ⅰ	単位mm、重 0.6g、サヌカイト
11 15	S-15	縄文	石鏃	長 27.0	短 21.0	厚 8.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 2.0g、下呂石
11 16	S-16	縄文	石鏃	長 (32.0)	短 (22.0)	厚 8.5	A	検出Ⅰ	単位mm、重 2.7g、下呂石、一部欠損
11 17	S-17	縄文	石鏃	長 (36.0)	短 20.0	厚 7.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 3.4g、下呂石、一部欠損
11 18	S-18	縄文	石鏃	長 (27.0)	短 (20.0)	厚 5.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 2.1g、サヌカイト、一部欠損
11 19	S-19	縄文	石鏃	長 (28.0)	短 (13.0)	厚 5.0	A	検出Ⅰ	単位mm、重 1.0g、サヌカイト、一部欠損
11 20	S-20	縄文	石鏃	長 (29.0)	短 17.0	厚 4.5	A	検出Ⅰ	単位mm、重 1.4g、下呂石、一部欠損
11 21	S-21	縄文	石鏃		短 16.0	厚 0.6	A	検出Ⅰ	単位mm、重 3.2g、チャート、一部欠損
11 22	S-22		石鏃		短 14.0	厚 0.5	B	SD22	単位mm、重 1.5g、下呂石、一部欠損
11 23	S-23		石鏃	長 (37.0)	短 13.0	厚 6.5	A	検出Ⅱ	単位mm、重 2.1g、下呂石、一部欠損
12 24	E-24	古墳	甕	13.1	6.1	18.3	A	SD32	台部打欠き、底部穿孔、使用痕無
12 25	E-25	古墳	甕	(16.0)			A	SD32	
12 26	E-26	古墳	甕	(14.0)			A	SD32	
12 27	E-27	古墳	鉢	(10.8)		6.6	A	SD32	
12 28	E-28	古墳	高杯	(22.2)	(14.0)	15.5	A	SD32	煤付着
12 29	E-29	古墳	高杯				A	SD32	
12 30	E-30	古墳	高杯		(12.6)		A	SD32	
12 31	E-31	古墳	壺	6.6	5.2	11.9	B	SD52	
12 32	E-32	古墳	器台		9.6		B	SD43	
13 33	E-33	古墳	甕	(14.0)			A	SD59	
13 34	E-34	古墳	壺				A	SD59	朱残存
13 35	E-35	古墳	高杯	(23.8)			A	SD59	
13 36	E-36	古墳	甕	(12.0)			A	SK47	
13 37	E-37	古墳	甕	(16.8)			A	SK50	
13 38	E-38	古墳	甕	(13.8)			A	SK50	
13 39	E-39	古墳	甕	(15.8)			A	SK50	
13 40	E-40	古墳	甕	(12.0)			A	SK92	
14 41	E-41	古墳	甕	(16.0)			A	SK09	
15 42	E-42	古墳	壺	(18.2)	(9.6)	(31.0)	B	SD26	口縁外面に朱残存
15 43	E-43	古墳	壺脚部?		(7.0)		B	SD41	煤付着
15 44	E-44	古墳	高杯	(22.8)			A	SD68	
15 45	E-45	古墳	壺	(15.2)			A	SD68	煤付着
15 46	E-46	古墳	甕	(15.0)			A	SD67	
15 47	E-47	古墳	壺	5.8			A	SD67	
15 48	E-48	古墳	壺	22.9			A	SD67	
15 49	E-49	古墳	甕	(11.1)			A	SD35	
15 50	E-50	古墳	高杯	(5.2)			A	SK54	
15 51	E-51	古墳	壺	(18.4)			A	SK54	
15 52	E-52	古墳	甕	(11.8)			A	SK54	
15 53	E-53	古墳	高杯	(23.8)			A	SK15	
15 54	E-54	古墳	甕	(12.0)			A	SK15	
15 55	E-55	古墳	高杯		(16.2)		A	SK15	
16 56	E-56	古墳	甕	(19.0)			A	SD82	
16 57	E-57	古墳	壺	(17.8)			A	SD82	
16 58	E-58	古墳	高杯	(19.6)			A	SD82	
16 59	E-59	古墳	壺		8.2		A	SD82	

図 No.	登録	時期	器種	口径cm	底径cm	器高cm	区	遺構	備考
16 60	E-60	古墳	甕	(13.8)			A	SD75	
16 61	E-61	中世	碗		(7.4)		A	SD75	
16 62	E-62	古墳	壺	(15.6)			A	SD75	黒斑・朱あり
16 63	E-63	古代	盤	(13.4)			A	SX01	最下層から出土
16 64	E-64	古代	杯	(13.2)	(5.4)	3.8	A	SX01	
16 65	E-65	中世	碗		(6.6)		A	SX01	
17 66	E-66	中世	碗	(13.6)	(7.2)	4.9	A	SD04	上層から出土
17 67	E-67	中世	皿	8.0	5.0	1.8	A	SD04	上層から出土
17 68	E-68	中世	皿	8.2	4.6	1.9	A	SD04a	
17 69	E-69	中世	皿	8.3	6.3	1.1	A	SD04b	
17 70	E-70	中世	碗	(14.6)	(4.8)	(4.7)	A	SD04b	
17 71	E-71	中世	碗	(13.3)	(5.0)	5.5	A	SD04b	
17 72	E-72	中世	碗	(11.8)	(4.6)	3.8	A	SD04b	
17 73	E-73	中世	碗	(13.8)	(5.4)	4.4	A	SD04b	
17 74	E-74	中世	皿	(7.8)	(4.8)	1.3	A	SD04b	
17 75	E-75	中世	皿	8.4	4.3	1.2	A	SD04b	
17 76	E-76	中世	皿	(7.8)			A	SD04b	
17 77	E-77	中世	卸皿	(20.0)			A	SD04	上層から出土
17 78	E-78	中世	鍋	(21.4)			A	SD04b	
17 79	E-79	中世	折縁深皿	(25.4)			A	SD04	上層から出土
17 80	E-80	中世	土瓶		(10.0)		A	SD04	上層から出土
17 81	E-81	中世	碗		(6.0)		A	SD04	上層から出土
17 82	E-82	中世	皿	(7.6)	(5.1)	0.9	A	SD05	
17 83	E-83	中世	皿	7.6	5.0	1.7	A	SD06	
17 84	E-84	中世	皿	7.7	4.9	1.7	A	SD06	
17 85	E-85	中世	碗	(15.5)	(5.7)	5.0	A	SD06	
17 86	E-86	中世	四耳壺	(14.0)			A	SD06	
17 87	E-87	中世	平碗	(9.0)			A	SD06	
17 88	E-88	中世	碗	(15.4)	(6.8)	4.4	A	SD07	
17 89	E-89	中世	皿	9.2	5.3	1.8	A	SD07	
17 90	E-90	中世	碗		(8.0)		A	SD07	
18 91	E-91	中世	皿	7.7	4.6	1.5	B	SD22	
18 92	E-92	中世	皿	(8.8)	(5.0)	1.3	B	SD22	
18 93	E-93	中世	皿	(12.0)	(7.0)	1.5	B	SD22	
18 94	E-94	中世	皿	(12.0)	(8.0)	1.7	B	SD22	
18 95	E-95	中世	皿	7.6	4.3	1.5	B	SD22	墨書
18 96	E-96	中世	皿	(12.0)	(7.2)	1.6	B	SD22	
18 97	E-97	中世	皿	(12.0)	(7.3)	1.7	B	SD22	
18 98	E-98	中世	皿	(10.0)	(4.0)	1.7	B	SD22	
18 99	E-99	中世	皿	7.9	3.9	1.6	A	SD11	
18 100	E-100	中世	皿	(8.3)	(4.4)	1.9	B	SD24	
18 101	E-101	中世	皿	(8.0)	(4.2)	1.5	B	SD23	
18 102	E-102	中世	碗	11.8	4.1	3.2	B	SD29	
18 103	E-103	中世	碗	(11.8)	(2.4)	3.9	B	SD29	
18 104	E-104	中世	碗	(13.4)	(6.1)	4.9	B	SD56	
19 105	E-105	中世	碗	(13.2)	(4.6)	3.8	A	SE01	
20 106	E-106	中世	碗	13.2	4.0	4.1	A	SD08	
20 107	E-107	中世	皿	(8.0)	(4.6)	1.7	A	SD08	
20 108	E-108	中世	皿	8.1	5.3	1.1	A	SD08	
20 109	E-109	中世	耳付小壺	(2.9)	(3.2)	4.1	A	SD08	
20 110	E-110	中世	碗		(6.4)		A	SD08	
20 111	E-111	中世	鍋	(26.8)			A	SD08	
20 112	E-112	中世	鍋	(21.0)			A	SD08	
20 113	E-113	中世	皿	(8.3)	(5.5)	1.0	A	SD09	
20 114	E-114	中世	鍋	(26.0)			A	SD09	
20 115	E-115	中世	皿	8.2		1.6	A	SD10	
20 116	E-116	中世	碗	10.2	4.2	3.2	A	SD10	
20 117	E-117	中世	碗	(11.8)	(3.2)	3.4	A	SD10	
20 118	E-118	中世	鉢	(29.6)	(9.4)	11.0	A	SD10	

図 No.	登録	時期	器種	口径cm	底径cm	器高cm	区	遺構	備考
21 119	E-119	中世	椀	(12.0)	(5.1)	2.7	A	SE02	
21 120	E-120	中世	皿		4.0		A	SE02	墨書
21 121	E-121	中世	皿	(8.0)	(4.4)	1.0	A	SE02	
21 122	E-122	中世	皿	(8.0)	(5.0)	1.0	A	SE02	
22 123	E-123	中世	皿	(7.6)	(4.5)	1.5	A	SE04	墨書
22 124	E-124	中世	椀	(14.8)	(6.5)	4.8	A	SE04	墨書
22 125	E-125	中世	椀	14.4	6.1	6.1	A	SE04	墨書
23 126	E-126	中世	皿	8.1	4.8	1.1	A	SD73	
23 127	E-127	中世	椀	13.1	4.3	3.6	A	SD76	底部穿孔
23 128	E-128	中世	折縁深皿	(23.8)			A	SD76	
23 129	E-129	中世	椀	(13.6)	(4.2)	2.9	A	SK60	
23 130	E-130	中世	椀	(12.1)	(2.0)	(3.6)	A	SK60	
23 131	E-131	中世	椀	(13.2)	(3.8)	3.4	A	SK60	
23 132	E-132	中世	鍋	(20.8)			A	SK60	
23 133	E-133	中世	柄付片口	(17.4)	(10.3)	9.0	A	SK60	煤付着
23 134	E-134	中世	仏供	9.5	6.1	4.6	A	SK60	
23 135	E-135	中世	四耳壺	(12.0)			A	SK60	断面に黒い付着物
23 136	E-136	中世	卸皿	(18.9)			A	SK60	
23 137	E-137	中世	皿	8.0	4.2	2.3	A	SK64	
23 138	E-138	中世	椀			7.6	A	SK64	
23 139	E-139	中世	甕	(30.0)			A	SK64	
23 140	E-140	中世	鍋	(30.0)			A	SK64	
23 141	E-141	中世	柄付片口		(8.4)		A	SK64	
23 142	E-142	中世	鍋	(23.0)			A	SK93	
23 143	E-143	中世	椀		(5.2)		A	検出Ⅱ	墨書
23 144	E-144	中世	羽釜	(31.0)			A	SK91	
24 145	S-145	中世	砥石	長 (9.4)	短 4.9	厚 3.1	A	検出Ⅰ	重 171.5g、泥質凝灰岩
24 146	S-146	中世	砥石	長 (5.2)	短 3.7	厚 2.7	A	検出Ⅰ	重 74.0g、泥質凝灰岩
25 147	E-147	中世	加工円盤						第1表参照
～196 ～E-196									
25 197	E-197	中世	陶丸	径 23.0			A	SD04	単位mm、重 12.4g
25 198	E-198	中世	陶丸	径 21.5			A	SK60	単位mm、重 11.0g
25 199	E-199	中世	陶丸	径 20.5			A	SK60	単位mm、重 8.6g
25 200	E-200	中世	陶丸	径 24.5			A	SK60	単位mm、重 (8.5) g、半分欠損
25 201	E-201	中世	土錘	長 (44.0)	短 14.0	孔径 5.0	A	検出Ⅱ	単位mm、重 6.6g、一部欠損



調査区全景



遺溝検出状況（北から）



遺溝検出状況（南から）



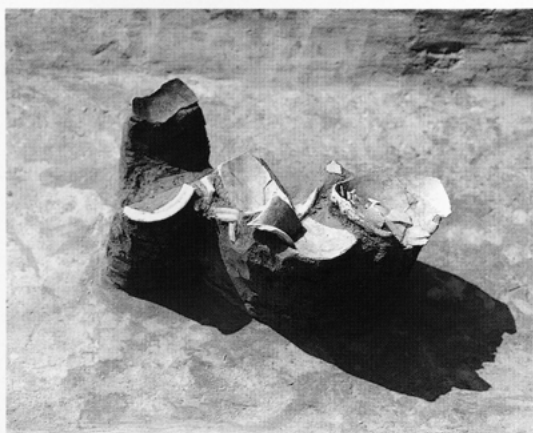
A区南側完掘状況（南から）



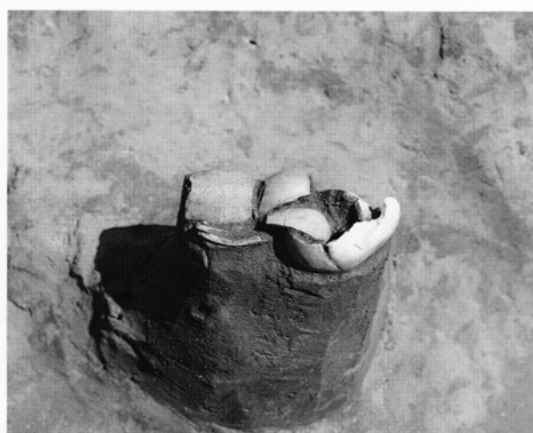
SD 32 遺物出土状況



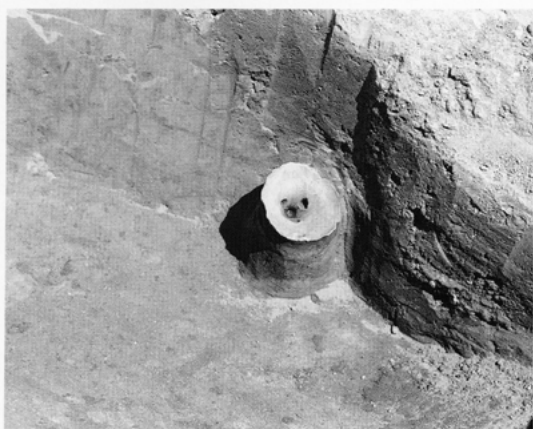
SD 32 遺物出土状況



SD 32 遺物出土状況



SD 52 遺物出土状況



SD 43 遺物出土状況



SK 09 遺物出土状況



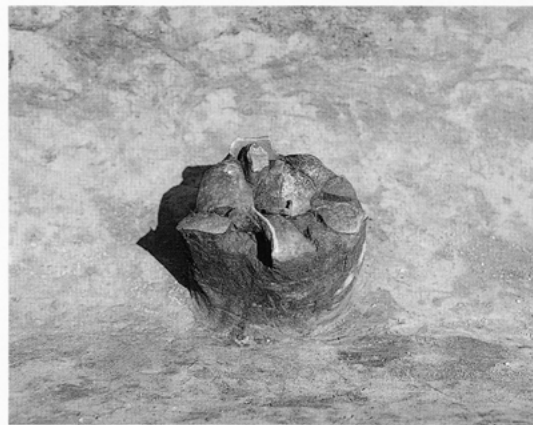
SK 09



SK 15



SD 35 遺物出土状況



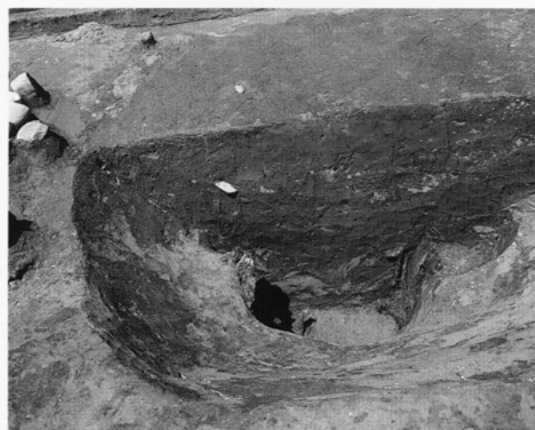
SD 35 遺物出土状況



SD 59 遺物出土状況



SK 60 遺物出土状況



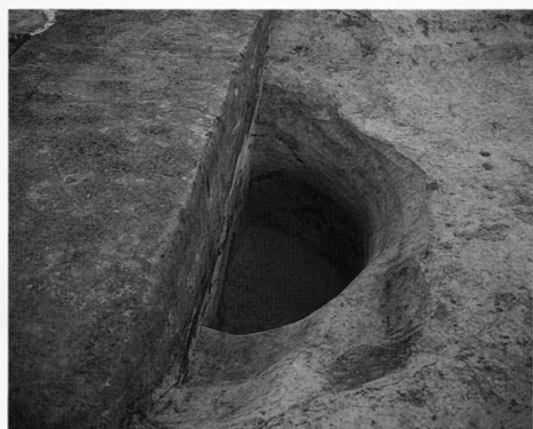
SE 02



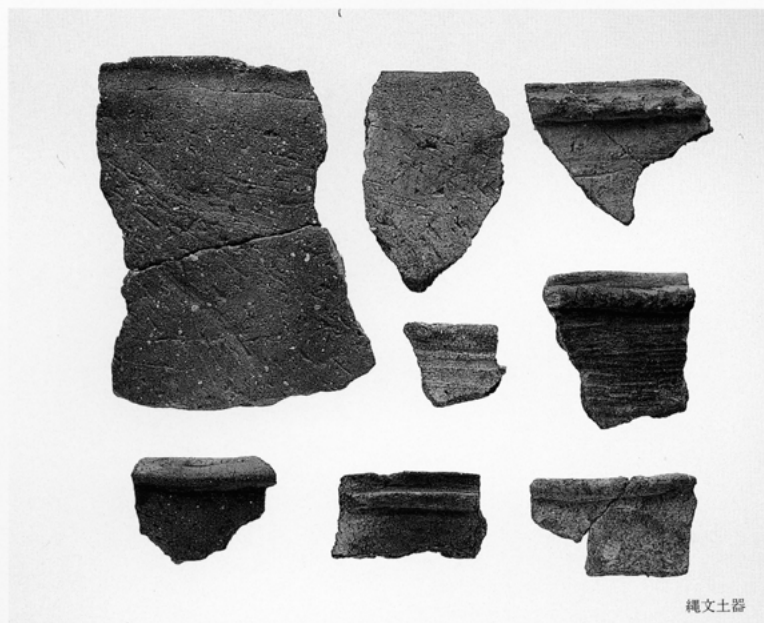
SE 02



SE 04



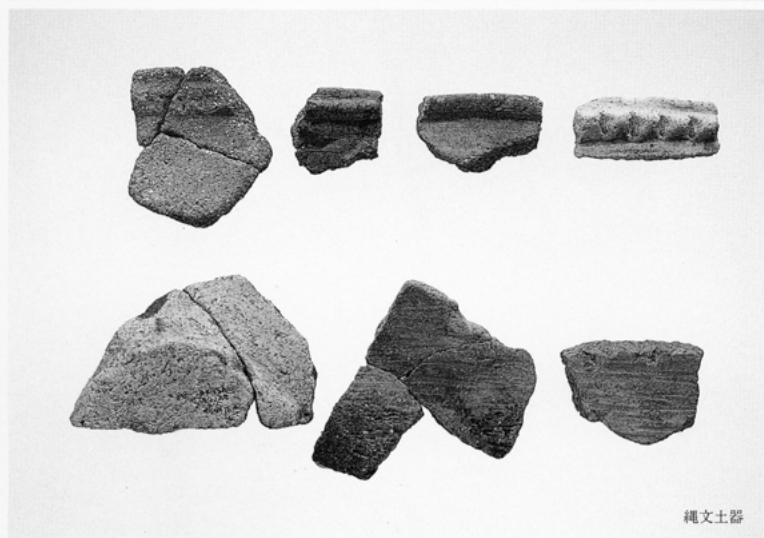
SE 01



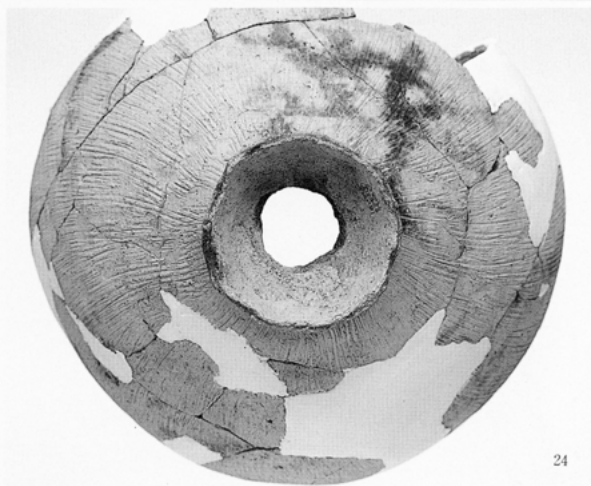
縄文土器



24



縄文土器



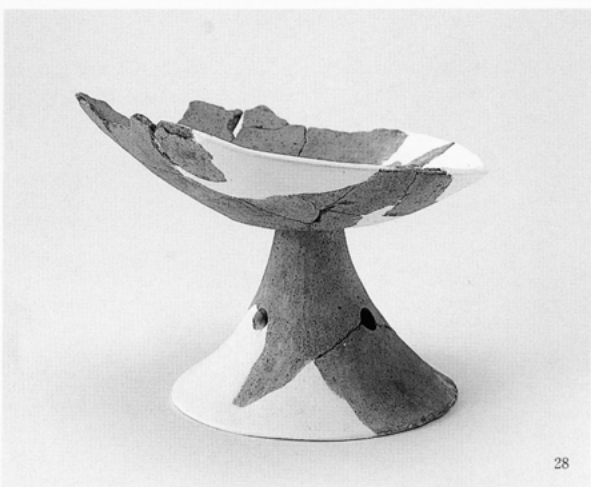
24



31



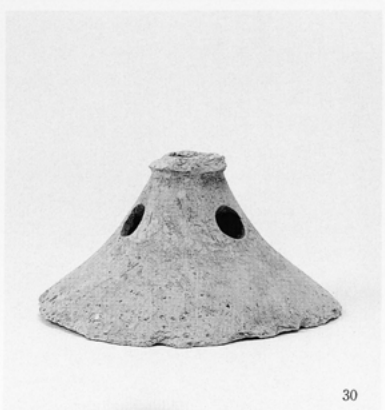
27



28



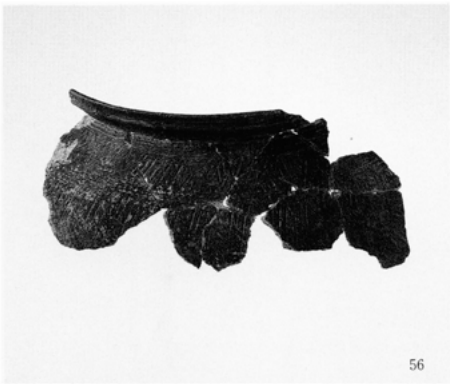
37



30



29





125



124



137



125



124



138



127



106



81



127



88



135



133



112



144



134



石鏃



石鏃



輸入陶磁器



10



145



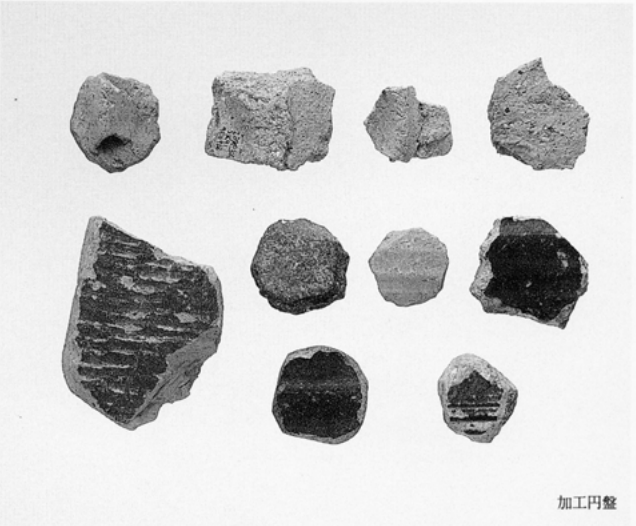
145



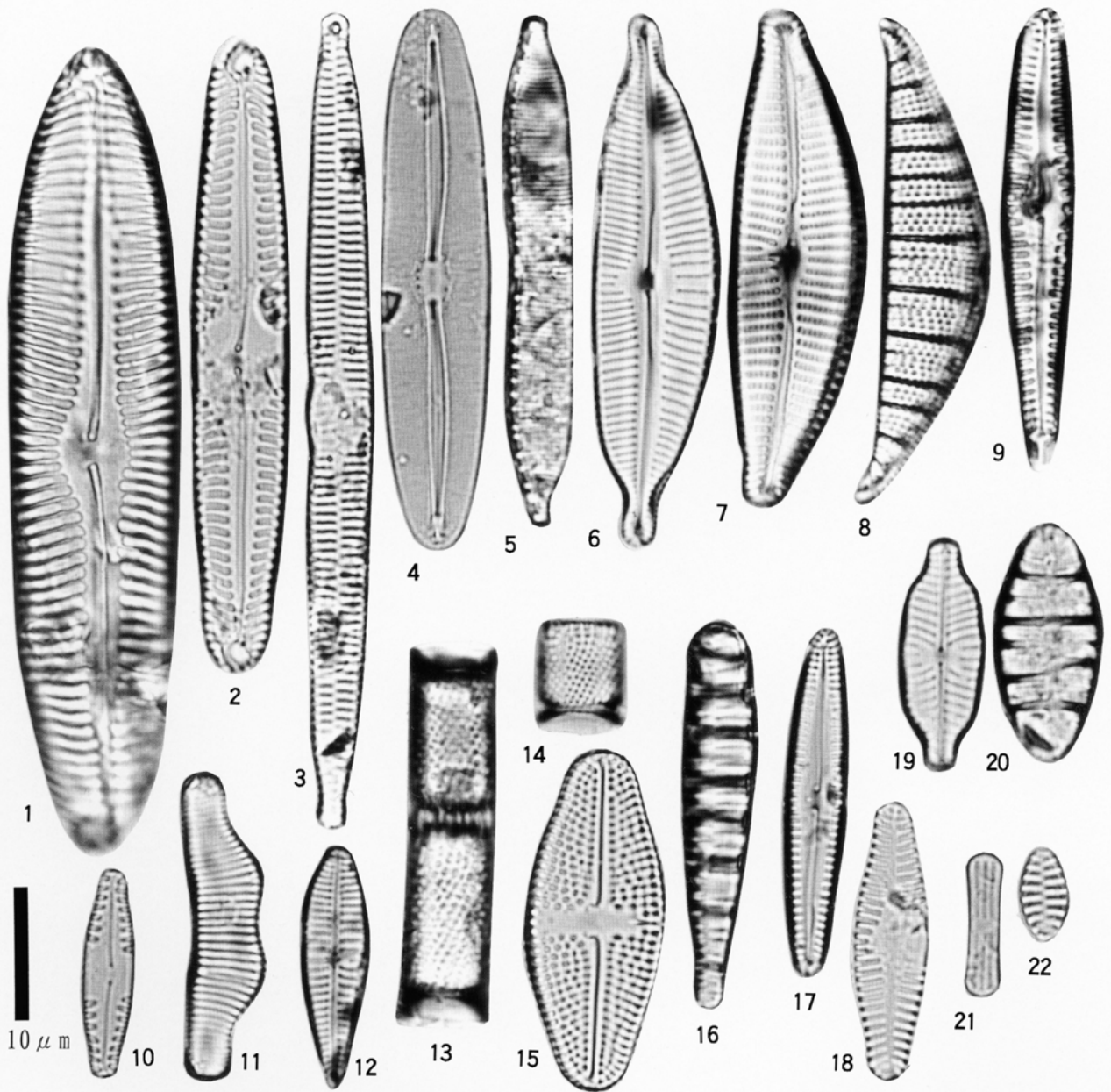
146



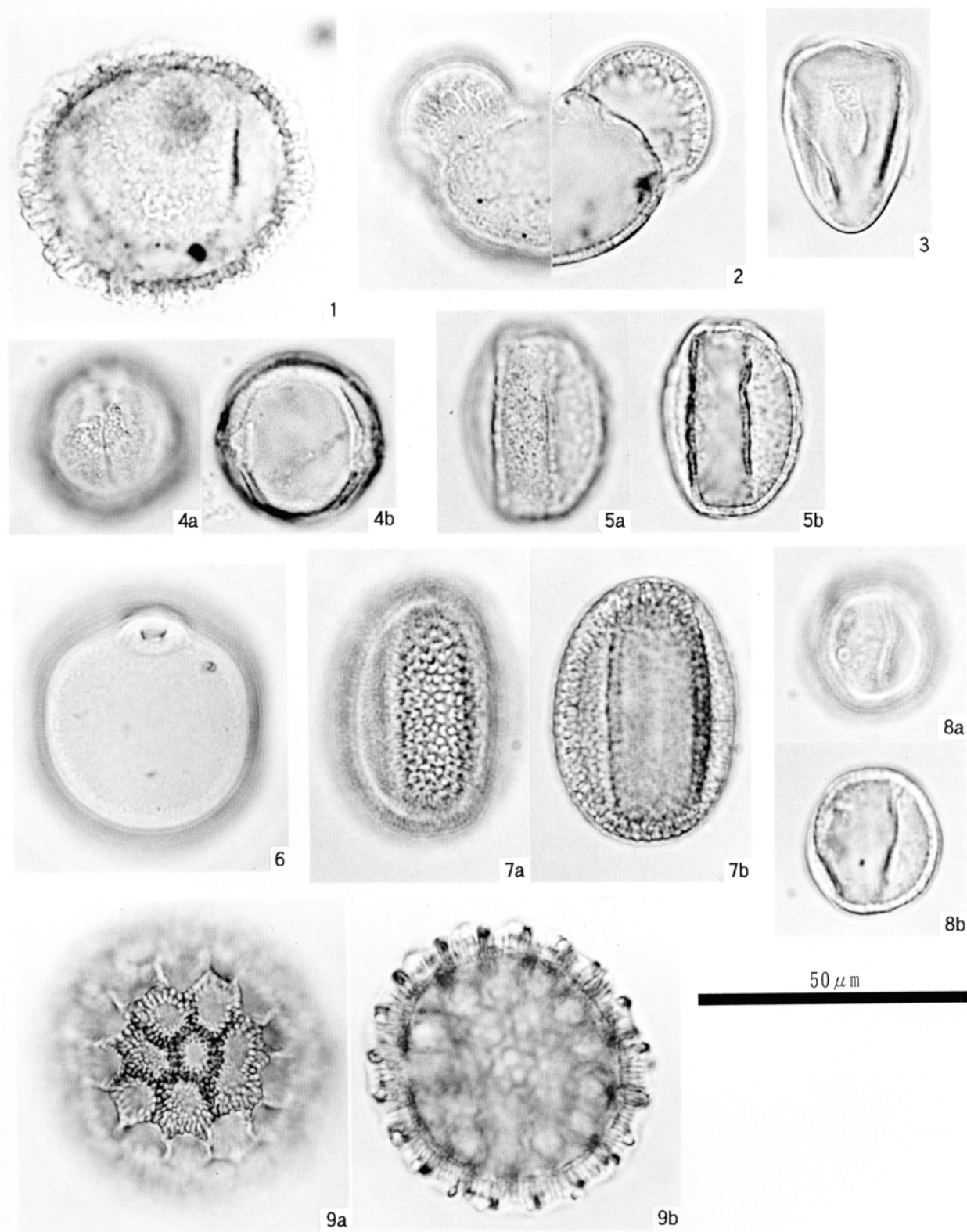
146



加工円盤



- | | |
|--|--|
| 1. <i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg | 12. <i>Gomphonema parvulum</i> Kueizing |
| 2. <i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg | 13. <i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.) Simonsen |
| 3. <i>Ceratoneis arcus</i> var. <i>recta</i> (Cl.) Krasske | 14. <i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.) Simonsen |
| 4. <i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni | 15. <i>Navicula mutica</i> Kuetzing |
| 5. <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow | 16. <i>Meridion circulae</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) V. Heurck |
| 6. <i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald | 17. <i>Gomphonema clevei</i> Fricke |
| 7. <i>Cymbella turgidula</i> Grunow | 18. <i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.) Grunow |
| 8. <i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller | 19. <i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick |
| 9. <i>Gomphonema sumatrense</i> Fricke | 20. <i>Diatoma hyemale</i> var. <i>mesodon</i> (Ehr.) Kirchner |
| 10. <i>Pinnularia subcapitata</i> Gergory | 21. <i>Navicula contenta</i> Grunow |
| 11. <i>Eunotia arcus</i> var. <i>bidens</i> Grunow | 22. <i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt |



- | | |
|-------------------|---------------|
| 1. ツガ属 | 2. マツ属 |
| 3. カヤツリグサ科 | 4. ブナ属 |
| 5. コナラ属コナラ亜属 | 6. イネ科 |
| 7. ソバ属 | 8. コナラ属アカガシ亜属 |
| 9. サナエタデ節-ウナギツカミ節 | |

花粉化石

報告書抄録

ふりがな	ひがしかりやすかみち
書名	東菟安賀道遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第77集
編集者名	伊藤太佳彦
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 1998年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしかりやすかみち 東菟安賀道	あいちけん びさいし 愛知県尾西市 かいめい 開明	07	005	35 度 18 分 31 秒	136 度 46 分 40 秒	199504～ 199509	4,424m ²	東海北陸自動車道建設に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東菟安賀道	集落	縄文		土器・石器	遺構は確認できなかった
		古墳	溝・土坑	土師器	
		中世	溝・土坑・井戸	灰釉系陶器・施釉陶器	

愛知県埋蔵文化センター調査報告書 第77集

東 荊 安 賀 道 遺 跡

1998年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化センター

印 刷 マツモト印刷株式会社
